梁啓超における中国史叙述
――「専制」の進化と「政治」の基準（二・完）

朱　琳

Abstract

Taking its cue from the three “encounters” in the acceptance of an evolutionary theory, using the evolution of “despotism” and the basis of “politics” as keywords, this paper focuses on the Chinese historical accounts of Liang Qichao（梁啓超）, which has not been systematically considered up to now, and aims to clarify the features thereof.

Firstly, it analyzes in detail the three “encounters” of Kang Youwei（康有為）’s “The Thesis on the Three Stages to Datong（大同）”, Yan Fu（厳復）’s “*Evolution Theory*（天演論）”, and the evolutionary theory via Japan. Next, it clarifies the concrete application to the Chinese history, as well as the diagram of political system evolution presented by Liang Qichao. Furthermore, it considers the proposed new world view based on such application, and the discourse on “The Second Warring States Period”. Finally, it casts in sharp relief the features of the Chinese historical accounts of Liang Qichao, while comparing the Chinese history discourse of Naitō Konan（内藤湖南）, which is widely known through the “Tang-Sung Transition, Modern Sung Dynasty（唐宋変革，宋代近世）” discourse（in short, there was a great transition between the Tang and Sung Dynasties, and the period after the Sung Dynasty is taken as the Modern Period）.

はじめに
一　進化論との三つの「出会い」
　1　厳復の『天演論』との出会い
　2　康有為の「三世進化説」との出会い
　3　日本経由の進化論との出会い（以上第 52 号）
二　政体進化の図式と中国史への適用
三　新たな世界像の提起と第二の「戦国」
四　内藤湖南の中国史論と比較しながら
おわりに（以上本号）

凡　例

＊梁啓超の文章の初出情報は，基本的に李国俊『梁啓超著述系年』（復旦大学出版社，1986 年）による。梁啓超の文章の引用に当たっては，読みやすさと検証の便を図るため，『飲冰室文集点校』全六集（梁啓超著，呉松・盧雲昆・王文光・段炳昌点校，雲南教育出版社，2001 年）の該当頁数を記す。『飲冰室文集点校』に収録されていない文章に関しては，『梁啓超全集』全十巻（梁啓超著・張品興ほか編，北京出版社，1999 年）と『《飲冰室合集》集外文』（上，中，下）（梁啓超著・夏曉紅編，北京大学出版社，2005 年）の該当頁数を記す。なお，字数の関係で，中国語の文章に関しては，本文中，基本的に原文を省略し，筆者による翻訳のみを記す。

＊内藤湖南の文章の引用は特に断りのない場合，すべて『内藤湖南全集』全十四巻（神田喜一郎・内藤乾吉編，筑摩書房，1969–76 年）による。

（承前）

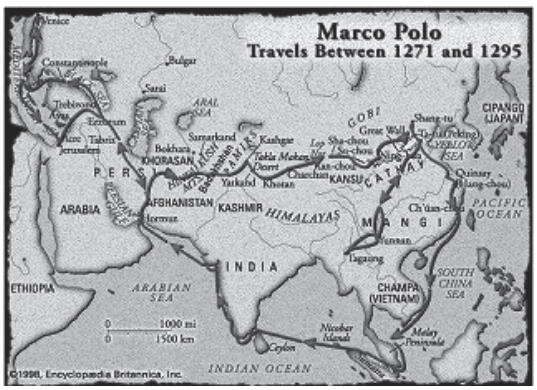
二　政体進化の図式と中国史への適用

「新民説・論進歩」の冒頭に，二つの興味深いエピソードが紹介されている[1]。一つは，西洋の本にある話である。初めて海を渡って中国に向かったある西洋人が，羅針盤は中国より伝わってきたものであり，二千年前に中国にすでにそれが存在したと聞いた。このものが西洋に伝わってから幾たびも改良され，効用が広げられてきたことを考慮すれば，母国の中国ではこの数千年の間，どれだけ発展しただろうと，彼は考えた。そのため，中国に着いたとたんに，彼はほかのことをさておき，まず一個を買おうとした。しかし，最新式のものは歴史書に載せた十二世紀にアラブ人によって伝来されたものとは大差がないことを知り，彼はがっかりして帰ったという。梁啓超は，この話は巧みに中国社会の停滞を皮肉ったものだと見ている。

いま一つは，梁啓超自身の経験談である。彼はかつて黄遵憲（1848–1905）の『日本国志』を読んで気に入り，それによって日本という新しい国の状況を知り尽くすことができると思い込んだ。しかし，清朝駐在日本公使の矢野文雄（龍渓）（1851–1931）に会って，たまたまその本の話をしたら，「これは明史に依拠して今日の中国の時局を議論するのと異ならない」と矢野は語った。それを聞いた梁啓超は怒ってその理由を聞いた[2]。矢野は「黄の本は明治十四年になされたものである。我が国では，維新以来十年間ごとの進歩は，その前の百年でも比べられないものである。この二十年前の本は，明史のようなものでなければ何であろうか」と答えた[3]。当時，梁啓超はまだその発言を疑っていたが，日本に来て以来，自らの見聞で検証し，信じるようになった。

黄遵憲（1848–1905）

さらに，梁啓超は，元代のマルコ・ポーロ（Marco Polo　1254–1324）の中国旅行記は現在の人のそれとはほとんど異ならないという『原富』（厳復訳の題名。日本語訳は『国富論』と題する）におけるアダム・スミス（Adam Smith　1723–90）の記述を挙げ，マルコ・ポーロにとどまらず，『史記』・『漢書』以来の二千年の古書における記載は，今日とはどれだけの差があるのだろうかと述べる。「同じく東アジアに位置し，同じく黄色人種の民として，なぜ一つは進んで，一つは進まず，これだけ雲泥の差が生じたのか」と感嘆する[4]。



マルコ・ポーロの旅程図

ここで，梁啓超は二千年間ほぼ変化のない中国と短期間に進歩した日本とを対照的に捉えている。では，中国におけるこのような停滞の状況をどう解釈するのか。それは，進化を「公例」（普遍法則）とする梁啓超の直面する重要な課題であ

る[5]。現状をもたらした原因として，彼は次の五つを挙げている。「一つ目は，大一統で競争が絶えたこと」，「二つ目は，野蛮な民族に囲まれ，交通が困難なこと」，「三つ目は，言文が分離し，人智が局限されたこと」，「四つ目は，専制が久しく国への民衆の関心が薄いこと」，「五つ目は，学説が狭隘で思想が窒息したこと」，である[6]。しかし，たとえ，中国の現状としては，思想や風俗，文字，器物などは，数千年前のそれと同じであり，日本や西洋と比べると，中国では進化の跡がほとんど見当たらないとしても，古今一切の事物が進化の枠から逃れないとすれば，中国にも必ず何か進化しているものが存在するであろう。梁啓超はここで「専制」を発見した。彼は中国における「専制政治」の進化のみが比類のないほど発達してきたとする。そこで，彼は「中国専制政治進化史論」を書いたのである[7]。

梁啓超は泰西のさまざまな政体分類論を挙げた上で，政体進化の図式を次のように描いている。

①族制政体⇒②臨時酋長政体⇒③神権政体⇒④貴族政体／封建政体⇒⑤君主専制政体⇒⑥立憲君主政体／革命民主政体[8]

彼はここに中国政治の発達の特徴が見出されるという。すなわち，第一に，欧州では，この六つの段階のすべてを備えているのに対し，中国では，前の五つの段階しか経験しておらず，第六段階にはまだ至っていない。第二に，欧州では，各段階の長さがそれほど離れていないのに対し，中国では，第五段階の成立が最も早かった上に，その段階のみが長い。第三に，欧州では，第四段階が最も勢力を占め，百年前にあってはその余炎がなお冷めていないのに対し，中国では，二千年前にすでにそれを一掃した。第四に，欧州では，第一段階の「族制」が早くに存在していないのに対し，中国では，数千年の間，第一段階と第五段階が併行している[9]。

では，なぜ中国と欧州との間にこういった差異が生じたのか。梁啓超は，専制政治の形成過程を，一方では君主への権力の集中化，他方では君主に対抗する豪族や貴族や封建諸侯の権力の消滅，いわば一つの過程の二側面として捉えている。そのため彼は，中国史における封建制度の変革（地方分権から中央集権へ）と貴族政治の消滅（寡頭政治から独裁政治へ）の二つの面から，欧州の政治的変遷と比較しつつ，差異の原因を分析している[10]。

まず，封建制度の変革についてである。

梁啓超の見るところ，欧州では，封建制の出現が遅かったが長らく続いたのに対し，中国では，秦以来，天下がほとんど一家のようになって一人の王に統治されており，その状態は，まさに「専制政体の発達の最も顕著な表れ」である[11]。中国の場合，既得の土地を人に分与する意味での「封建」は周代に始まり，周の七百余年間は「封建政治の全盛時代」であるが，秦の始皇帝が六国を統一して「郡県」を実施するに至ると，「封建」が一掃された。その間の春秋戦国時代は「封建」と「郡県」の交替する過渡時代であり，数千年の中国史上政治界の変動の最も激しかった時代でもある。漢の州牧，唐の藩鎮のような地方分権の有力な勢力でさえ，中央集権の趨勢を変えられなかった。梁啓超は「封建」の変遷を軸に，次のように時期区分を行ない，中国史を「専制」の進化史と捉えている。

黄帝から周初までは，封建未形成期である。周から漢初までは，封建全盛期である。漢の景帝，武帝以後清初までは，封建変相期〔郡県全盛期〕である。康熙帝が三藩を平定した以降は，封建全滅期である。酋長から封建への変化は，専制の進化である。真の封建から有名無実の封建あるいは有実無名の封建への変化は，専制の更なる進化である。封建を名実ともに一掃したことは，専制のより一層の進化である[12]。

「封建」は中国だけのものではなく，欧州にも日本にもある。だとすれば，なぜ「封建」が消滅した

ら，欧州と日本では「民権」が強くなったのに対し，中国では「君権」が強くなったのか。梁啓超は次のように論を展開している。欧州では，「市府」があって自治が発達した。すなわち，欧州における「封建」の消滅は，君主によったのではなく民衆によった結果である。日本では，貴族的資格を帯びる藩士たちが連合して倒幕と明治維新を行なった。すなわち，日本における「封建」の消滅は，君主によったのではなく自力によった結果である。一方，中国では，数千年来，士や民が政治に参与するどころか，その思想さえなかったため，「封建」の興廃のすべては君主の所業であり，一般民衆はそれだけの自治力を持たず，強力な専制を行なわなければ立国できないのである。したがって，歴史をさかのぼってみれば，「小康」と称される時代は必ず中央集権の最も盛大で強固な時代であった。専制が弱まったら，分裂が起こり，征伐が行なわれ，兼併が進んでいく。兼併が多ければ，専制がさらに進んでいくのが必至である。普通は，民権が強くならないのは専制の抑圧の結果であり，また，専制がよく行なわれているのは，民権が確立しないことによると分かっているが，欧州の人にとって，虐政の苦は「封建」の時代が最も甚だしい。では，「なぜ中国における「封建」の消滅は欧州より先であったのに，専制の時代が長く，却って欧州の後まで続いたのか」と，梁啓超は問いかける[13]。

この問いに答えるために，梁啓超は貴族政治に重点を置いて検討を行なうのである。

彼はまず，「貴族政治は〔君主〕専制政治の一大障碍である」と断言する[14]。彼は，欧州の数千年の歴史を貴族と平民との闘争の歴史と捉え，阻害力も動力もここにあるため，「貴族」の二文字は欧州では政治上の最大の一要素であるとする[15]。そして，アリストテレスでさえ奴隷制を「天然公理」と見なすことを挙げ，貴族政治の弊害の大きさを示し，貴族の存在で階級を生じさせてしまい，国中軋轢が絶えなくなることから，貴族政治が最も不平等で不自由な政治であると，彼は考える。欧州では君主専制政治が盛んにならず，盛んになっても長続きしない原因もここにあるとする。

一方，中国の場合，階級（身分制度）が存在しないことは世界に誇るべき一事であり，それは貴族政治が長くなかったことによるという。中国の貴族政治が最も盛んな時代は堯舜のときであり，当時君主となる人も貴族によって選ばれたに過ぎなかった。禹になると，権力が強くなり君主世襲が定められた。ここで，貴族政治が初めて抑えられ，専制の政体が一歩進化したのである。そして，周の一代も実に貴族政治の時代であったが，王位の興廃が貴族に左右される堯舜のときと比べれば，王の名を借りて行動する周の時代では権力が縮小した。さらに，戦国時代になると社会の風潮が一変した。一方，孔子・墨子・老子などはみな万民平等の大義を唱え，貴族政治を消滅させるのに必要な学理を明らかにした。また一方，時勢の赴くところ，兼併が進められ，列国間の競争が激しくなり，貴族に頼るだけでは勝つことができなくなることを知り，争って人材を登用するようになった。これらの原因によって黄帝以来の貴族政体が一掃され，貴族政治が再度抑えられ，専制の政体が一歩進化したのである[16]。

梁啓超の見るところ，戦国時代から今日まで，六朝時代にのみ欧州に似た貴族階級（身分制度）が存在し，まさに「中国数千年来社会上一怪現象」[17]であったが，それは実力ではなく大体虚名によるものであり，いわゆる「門第」も政治権力とは全く関係がないものであった。それ故，六朝時代には貴族が存在していても，貴族政治が存在したとは言えず，専制政体の進化を少しも損なうことはないという[18]。

その後の異民族の中国統治に関しても，梁啓超は独自の見解を示している。まず，元代に民衆が統治者の設けた身分制度に束縛された現象について，梁啓超は，それは我が民族自らつくった現象ではなく，国が滅ぼされてやむを得なかったのであり，この百年間は貴族政治だと言えても，元代の貴ぶものは我々の貴ぶものではないし，元代の貴族が元代の専制を擁護すること自体も専制政体の進化であると分析する[19]。そして，清代において，身分の高いほうから満洲人，蒙古人，漢人といった身分制度が存在しても，政権の分配は満漢半々であり，清朝中期以降，「物競天択」（生存競争）の結果，漢族への

同化が進められ，政権の多くが漢人の手に帰されたことからして，数千年の中国史の「常格」と見なしてよいという。しかも，今後も久しく消滅した貴族政治が再度戻ってくることはない，と梁啓超は信じている[20]。

要するに，中国では秦漢以来，貴族政治は早くに絶えた。欧米や日本は近世，最近世になってはじめて一つの階級となったのに対して，中国は二千年前にこれを達成した。中国と欧米・日本との間の差が大きかった。ここで梁啓超に残されているもう一つの問題は，「最も不平等な政治，最も不自由な政治」とされた貴族政治を，中国は早く除去したならば，平等・自由，政治の治世の面で欧米を凌ぐはずなのに，現在の結果はまったく逆であるのはなぜなのか，ということである[21]。

梁啓超の解釈では，貴族政治は民権の発展に益するという。第一に，貴族政治は，平民政治の阻害者であると同時に，また君主専制の強敵でもある。西洋史に徴してみれば，国民議会の制度はすべて貴族が起こしたものであり，貴族政治は平民政治の媒介者になれる。第二に，政治の発達とは多数者が少数者と戦い勝つことである。貴族は平民に対しては少数であるが，君主に対しては多数である。それゆえ，貴族は君主をよく抑え，相当の権利を要求し，それで国憲の根本がほぼ確立された。後に平民もこれをまねた。君主は「聖」・「神」と自称し，平民はそれによる専制を天賦のものと見なしてしまったが，貴族の専制になると，少数の人によるものとして，自ずから多数の人の嫌悪感を招き，貴族に何を恐れるものがあるかという思想が平民の間で起こったのである。第三に，昔，君主と貴族が連合して平民を抑圧したこともあり，君主と平民が連合して貴族を弱めることもあったが，君主専制が極度に発展したとき，貴族と平民が連合して君主を抑えることになる。君主・貴族・平民の三者の相互の牽制と監督によって，どの一方も恣意的に行動できない。以上の三つの原因があって，欧州では貴族があって民権が伸びたのに対し，中国では貴族がなくて民権が伸びなかったのである。

そして，早くに自由と平等の説に心酔し，その大義を中国に移植し，人々を数千年の専制から蘇らせようとした梁啓超ではあるが，これをスローガンとして民衆に呼びかけたところ，あまり効力が見られないのはなぜなのか，と彼は自問する。彼の解釈によれば，欧州では，貴族と平民との二階級における権利と義務が大きく離れており，実に不平等である。君主の圧制に貴族の圧制を重ねており，実に不自由である。あまりにも不平等・不自由なので，平民は日々平等・自由を渇望し，一種の反発力になり得た。一方，中国では，出身に関係なく科挙に合格さえすれば官僚への道が開かれるし，政府とは関係なくこの土地に「自生自滅」できる。そのため，反発する力が足りなかった。要するに，「有形の専制」・「直接の専制」の存在する欧州とは異なり，「無形の専制」・「間接の専制」の存在する中国では，ルソー（Jean-Jacques Rousseau 1712–1778）やモンテスキュー（Charles-Louis de Montesquieu 1689–1755）の議論があまり大きな影響を及ぼさなかったのである[22]。

「中国専制政治進化史論」に先立ち，中国と欧州との国体の異同について，梁啓超は関連する論説をすでに発表している。彼は，「家族時代と酋長時代」，「封建時代と貴族政治」に中国と欧州との共通点を見出した。例えば，列国並立，貴族政治，民権伸張，競争による人材登用，言論思想の自由による哲学・文学の繁盛など，周とギリシアの国体には共通点が最も多いという[23]。梁啓超の見るところ，春秋戦国以降，秦漢の統一で中国が「小康」に入り，ギリシア以降，羅馬の統一で欧州が「小康」に入ったことは，形式からみれば類似しているが，実際には大いに異なっている[24]。そして，一切の相違点は次の二点に収斂されると考えられる。第一に，「欧州はローマ以後依然として列国の状態であるが，中国は両漢以後永らく一統の状態である」。第二に，「欧州には国民に階級を分ける風潮があったが，中国にはなかった」。「文明の公例」をもって論じるならば，「列国並争」よりも「合邦統一」，「有階級の民」よりも「無階級の民」のほうが勝るのは一般に認められるところではあるが，中国は進化が欧州よりも二千年も早かったのに，今日の欧州と比べると文明に天地の差があるのは，なぜであろうか。

また，春秋以前，中国と欧州とは極めて類似していた。漢以降中国は急に進んだが，欧州はもとのとおりであった。今世紀以来欧州は急に進んだが，中国はもとのとおりであった。二千年蓄積されてきた中国の進化の状況が悪くなったのは，なぜであろうか。さらに，欧州ではギリシア・ローマ以来すでに民選代議の政体があったが，中国ではそういう話を全く聞いたことがないのも，奇怪なことである。

梁啓超の分析では，内が統一し外と無干渉の状況，そして階級がなく現状に安んずる状況にあっては，他人に権利があることを知らないし，自らも権利の伸張を求めない結果，代議政体が生まれてこないのは当然である。したがって，結局それも上述した二点に帰することができるという[25]。要するに，梁啓超にとって，中国は進んでいたにもかかわらず遅れたというのではない。むしろ，進んでいたが故に遅れたのである。中国をある段階まで進化の最先端に立たせていた要因が，そのままある段階以降中国を停滞させる原因となった，と彼は中国史と欧州史を比較した上で解釈したのである。

進化論の視点をもって中国の政治史に「専制」進化の特徴を発見した梁啓超は，政治を基準に，さらに自分なりに中国史の時代区分を試みた[26]。

第Ⅰ種：「中国史叙論」の「第八節」で，梁啓超はその時代区分を明確にした。第一，上世史，黄帝から秦の統一まで，「中国の中国」の時代；第二，中世史，秦の統一から清の乾隆末年まで，「アジアの中国」の時代；第三，近世史，乾隆末年から今日まで，「世界の中国」の時代の三期に分けている[27]。それに先立つ「第七節　有史以前之時代」において，梁啓超は黄帝から書き始めた『史記』の識見に賛同し，自らも「黄帝以降を有史時代とする」という[28]。

第Ⅱ種：「国家思想変遷異同論」において，欧州の国家思想の過去・現在・未来の変遷を跡付け，一，家族主義時代，二，酋長主義時代，三，（独夫）帝国主義時代，四，民族主義時代，五，民族帝国主義時代，六，万国大同主義時代，の六期に分けている。そのうち，一，二，三は過去，四と五は現在，六は未来とする。そして，現在，欧州は四と五の転換期にあるのに対し，アジアは三と四の転換期にあるとする[29]。

第Ⅲ種：「堯舜為中国中央君権濫觴考」において，一，黄帝以前，野蛮自由時代；二，黄帝から秦の始皇帝まで，貴族帝政時代；三，秦の始皇帝から清の乾隆帝まで，君権極盛時代；四，清の乾隆帝から現在まで，文明自由時代，の四期に分けている[30]。

第Ⅰ種は「（中国）民族」の概念，第Ⅲ種は政治体制による区分である。この二種の区分には，三期と四期という時期の数の違いはあるが，時期の区切りでは一致しており，整合関係を保っている。しかも，いずれも発展的に中国史を理解しようとする点では変わりはない。第Ⅱ種は基本的にヨーロッパ国家思想の変遷を跡付けて行なった区分ではあるが，それをアジアに適用すれば，中国はまさに「君主専制政治」（「（独夫）帝国主義」）から「国民立憲政治」（「民族主義」）へと転換する時期にさしかかっていると言えるであろう。

三　新たな世界像の提起と第二の「戦国」

アヘン戦争以降の国際関係における一連の急激な変化は，中国の知識人の世界像に大きな変動をもたらした。多くの不平等条約を押しつけられ，それまでの冊封・朝貢体制が徐々に解体していくとともに，皇帝を頂点とし，自らが世界の中央に位置し，周囲に比肩する文明を持つ相手が存在しないとする「天下」観，そして，天子である皇帝の徳治と教化の及ぶ文明的領域を「中華」，その外側を「夷狄」と見なす「華夷」的な世界像も，次第に見直す必要に迫られることになった。西洋の機械・技術の先進性を認め，「夷の長技を師とし以て夷を制す」（魏源の語）と唱えたり，現在の変動を秦漢帝国の成立（「封建の天下」から「郡県の天下」へ）と並ぶ大変動と位置付け，「郡県の天下」から「華夷聯属の天

下」（鄭観応の語），「華夷隔絶の天下」から「中外連関の天下」（薛福成の語）への転換と認識し，洋務運動を推進する知識人が出現したのである[31]。

とりわけ，日清戦争の敗北によって洋務運動の失敗が宣告され，もともとあった中華意識はあたかも倒錯した自意識に過ぎないものに映っているだけであり，政治制度を含め抜本的な改革をしなければならないという論が浮上したのである。変法論の代表格である梁啓超は，次のような現状認識を示している。

> 今日の地球が縮小し，我が中国と天下万国が近隣のようになり，数千年の統一はにわかに並立に変わっている。経済世界の競争は月ごとに異なり歳ごとに違ってくる。いまは中国が多くの人の関心の的となり，今後社会上の変動，不可思議なものが出るであろう。数千年の無階級が，にわかに有階級になる。二千年の停滞で，進歩を得ることができなかった。今日，退歩に進歩を求めることができれば，或いは我が中国がなお飛躍の日を有するであろう[32]。

進化論や明治の国家思想を受容した梁啓超は，こういった認識を念頭に置きながら，中国における「国家」の創立，「国民」の創出の必要性を唱え，次のように述べている。

> 今の世界は昔の世界ではなく，今の人は昔の人ではない。昔，わが中国に部民がいても国民はいない。国民になれないわけではないが，勢がそうさせたのである。わが国は夙に巍然と東方に屹立しており，まわりを囲んでいるのはみな野蛮な小国であり，他の大国とも一つも交通していないため，わが民は常に国を天下と見なした。（中略）しかし，今日は列国並立・弱肉強食・優勝劣敗の時代であるため，この資格〔国民の資格〕を欠けば，決して天地に自立することはできない[33]。

さらに，その原因として，梁啓超は次の二点を

魏源（1794–1856）

鄭観応（1842–1922）

薛福成（1838–1894）

挙げている。一つは，天下を知っていても国家を知らなかったことである。いま一つは，一己を知っていても国家を知らなかったことである[34]。彼は「国は，対応をもって成立するものだ」と考え，中国における国家思想の発達が欧州より難しいのは，自己尊大というよりも，地理上と学説上の原因が大きかったという[35]。平原が広くて統一の勢いがあり，秦以降の二千余年，分裂の期間が少し挟まったほか，ほぼ「四海一家」の状態にあり，たまに割拠の状況が生じたとしても，すぐさままた合併されたりした。まわりを囲んでいるのは多くの野蛮な民族であり，幅員であれ，人口であれ，文物であれ，中国に及ぶものは一つも存在しなかった。そして，戦国以前は地理上まだ併合されておらず，群雄が並立し，国家主義の議論が最も盛んであったが，一旦帝政が確立され中央集権が実施されるようになると，大局が定まり，国家主義もついに絶ってしまった[36]。

「国家」・「国民」を中心的概念とする梁啓超の主張は，中国はもはや皇帝を頂点とする階層的な秩序，また，中国文明を中心とする同心円的な秩序，いわば「一統垂裳」から，多くの国家が多元的に存在し，頂点も中心も持たない「列国並立」の「生存競争」の場に引き込まれたという現状認識に基づいている。それは，伝統の「華夷」的世界像から，西洋を頂点とする文明の単線的・段階的発展の世界像への転換を意味し，まさに後の知識人にとって共通の前提となる新たな世界像の提起にほかならなかった。

こういった認識が自国の歴史に逆投影された時，中国史のイメージもまた変化していく。聖人君主の作り出した三代，とりわけ周代封建制こそが理想的社会秩序であり，理想的社会秩序が上古に存在し，その後の歴史はそこからの逸脱ないし堕落であるというのが，儒教的歴史観の基本的な前提である。中国史上，この前提に基づき「復古」の体裁をとって現実改革を唱える論が絶えなかったが，十九世紀末になると，社会の発展を不可逆的な過程と捉える進化論の導入によって根本的な転換が訪れ，この儒教的歴史認識や社会秩序認識の前提を覆した。ここで，梁啓超が直面している重要な課題は，いかに伝統的尚古史観を乗り越え，進化論の枠組みで中国史を理解するかである。この作業は「中国の旧史」への厳しい批判から始まった。

では，梁啓超にとって真の歴史とは何か，そして，歴史家としてどういうふうに歴史を記述すべきなのか。彼は「中国史叙論」において，「近世の史家は，必ず事実の関係とその原因結果を説明しなければならない」，「必ず人間全体の運動進歩，すなわち国民全部の経歴およびその相互の関係を探察しなければならない」と指摘する[37]。また，「新史学」において，（1）歴史は進化の現象を叙述するものであり，（2）歴史は人群進化の現状を叙述するものであり，（3）歴史は人群進化の現象を叙述しその公理公例を求めるものである，との三点を挙げている[38]。そして，歴史家の役目について，彼は「凡そ史家の義務は世界進化の大理原則を按じ，これを過去の確実な事に証し，以て国民の精神を引導することを尊ぶものである」とする[39]。梁啓超は，「つとめて国民に我国の世界における位置を知らせ，東西列強の我国に対する政策を知らせ，過去を鑑み，現在を熟知し，将来をはかり，自国を内にさせ外国を外にさせ，すべてを天演学，物競天択，優勝劣敗の公例をもってすべきである」と強調し，進化論的歴史観を軸に，現実の国際認識と結び付けながら，中国史の読み直しを行なった[40]。

そこでまず注目すべきなのは，梁啓超がそれまでの春秋戦国評価を逆転させたことである。

梁啓超以前の知識人の間で，現実の西洋社会の列国並立の状態を中国の春秋戦国時代の封建諸候の分立状態と重ねて解釈する論がすでに数多く存在していた。しかし，そこでは「邪説暴行」・「処士横議」といった春秋戦国期への悪いイメージがそのまま投影され，西洋国際社会は露骨な実力主義が横行し，道義性を欠き，本質的に不安定な秩序にあると見なされる傾向が強かった[41]。それに対して，梁啓超は，「春秋戦国期は，実に封建と郡県の過渡時代であり，中国数千年来，政治界の変動が最も激しい時期であった」[42]という基本認識に立ち，それを競争社会としてのプラスのイメージで語り，「優勝劣

敗」・「適者生存」の冷酷な法則が貫徹する，第二の「戦国」である現実の国際社会において，中国が「淘汰」を免れ得ない劣者の運命からいかにして抜け出すのか，という課題に取り組んだのである[43]。

彼にとって，「中国の周と秦の間は，思想が勃興し，才智が雲のように湧き，西方のギリシアに譲らないほど」[44]であり，「上は国土・政治より，下は人心・風俗に及ぶまで，みなそれまでと截然と一線を劃した」[45]春秋戦国時代は，まさに競争熾烈・思想自由・人材済々・文物発達の黄金時代なのである。「しかし，漢代以後二千余年，状況がますます悪くなってきて，今日にいたると，衰退萎縮がますます甚だしいものになっている」[46]。なぜこのような状況になってしまったのか。秦の始皇帝による中央集権帝国の成立（「政治の専制」）と漢の武帝による「罷黜百家・独尊儒術」の文教政策の確立（「学説の専制」），いわば政治と思想の統一によって，競争が停止した結果，中国社会は二千年あまりほとんど大きな変化のない，一種の停滞の状態に陥ってしまったのである[47]。

自由，とりわけ精神の自由を極めて重視する姿勢は，梁啓超の一生を貫徹している。彼は「思想の自由・言論の自由・出版の自由，この三大自由は，実に一切の文明の母であり，近世世界の種々の現象は，みなその子孫である」[48]と明言している。春秋戦国期を高く評価したその一つの理由もここにあった。彼は次のように述べたことがある。

> 中国は数千年来，学術の面で戦国ほど盛んな時期はなかった。ほかでもなく，学界の「奴性」〔奴隷根性〕が未だ形成されていなかったからである。漢武帝の「罷黜百家」〔儒学を独尊の地位にする思想統一の政策〕に至ると，思想の自由の大義が次第に失われ，宋元以来，正学と異端の辯がますます厳しくなり，学風の衰退もますます甚だしいものになる。本朝〔清朝〕の考拠家が字句の異同の舌戦に疲れ，年月の比較に汲々するようなことは，なおさら取るに足りないのである。爾来，士大夫もまたこの学の無用さを知り，変えようと考えるが，中国の学風の破壊は，単にその形式にあるだけでなく，その精神にこそあることを知らない。（中略）いわゆる精神とは何ぞや。すなわち，つねに一種の自由独立，門戸に頼らず，他人からの受け売りをしない気概を有するのみというのである[49]。

そして，1902 年にその主要部分が執筆された「論中国学術思想変遷大勢」では，儒教中心の歴史観を排し，従来異端が猖獗を極めた混乱期とされてきた先秦時代を，思想言論の自由が実現し，思想的多元性が実現していた中国学術思想の全盛時代として叙述し，そのなかで，孔子を「諸子」の一人へと格下げし，他の諸子と同じ土俵の上で比較を行ない，その地位の相対化をはかった[50]。また，「私は孔子を愛するが，私は真理を一層愛する」と公言する「保教非所以尊孔論」の一文において，「保教」に反対する複数の理由のうち，その最大のものとして，「保教の説は国民の思想を束縛する」という点を挙げている[51]。

> わが国では，学界の輝かしさ，人物の偉大さという点において，戦国時代ほどめざましかった時代はない。けだし思想の自由がもたらした明白な結果である。秦の始皇帝が諸子百家の著書を焚き，方術の士を坑するに及んで，思想は窒息させられた。漢の武帝が六芸〔六経〕を持ち上げ諸子百家を退けるに及んで，およそ六芸の科目に入らないものはまったく献上されなくなり，思想はまたも窒息させられた。漢よりこのかた，孔子教〔儒教〕を行なうと称して，今日で二千余年になる。そして，誰もがいわゆる「某々を持ち上げ，某々を退ける」ことを一貫した精神としてきた。それゆえ，正統と異端の争いがあり，今文と古文の争いがあり，考拠を言えば師法を争い，性理を言えば道統を争って，それぞれ自分こそ孔教〔儒教〕であると言い張り，他人を排斥する際には「孔教でない」と決めつけた。そこで孔教の範囲は日に日に縮小していったのである。（中略）いず

れも思想がある一点〔儒教〕に束縛され，自ら新境地を開拓できなかったことによるのである[52]。

つまり，「文明が進む理由は，その原因は一つではないが，思想の自由がその根本的原因である」とする梁啓超にとって，「絶対的な信仰」・「邪説の排除」を不可欠の要素とする「宗教」は，進歩の障害であった[53]。彼は，儒教を独尊的地位に置くのは実に孔子の本意とは乖離しているものであり，真に孔子を尊敬するならば，儒教を諸子百家との活発な思想的競争の場に帰らせなければならない，と強調している。

> 思想の自由は，文明発達の根源である。様々な説が色々な形で興ってきて，互いに競争するのに任せておけば，世界は自ずと進歩してゆく。『中庸』の「道は並び行なわれて相悖らず」という考え方は，三世それぞれを並び立つものとする『春秋』の考え方に基づいており，それこそが孔子の真の姿なのである。漢以後になると儒教一尊に定まり，名目では孔子を尊ぶということではあるが，実は孔子の意に背くこと甚だしい状況になり，二千年来，全ての人の思想を自由にさせず，奇抜な議論を発する者がいると，よってたかって「非聖無法」と見なした。これこそが智識が発達し得なかった理由なのである[54]。

次に，当時中国が国際社会においてどのような位置付けをしているのか，変化しつつある世界で中国が直面する課題は何なのかについて，梁啓超の国際政治認識を見てみよう。

梁啓超は，今日の欧米では，民族主義と民族帝国主義が交替する時代であり，今日のアジアでは，（独夫）帝国主義と民族主義が交替する時代であると言い，民族主義と民族帝国主義とを峻別し，基本的に国際社会をこの二つの原理の葛藤する舞台だと捉える[55]。そして，学界は，国家思想をめぐって，ルソーの民約論に代表される「平権派」とスペンサーの進化論に代表される「強権派」との二大学派に分かれており，民主主義が前者の思想，民族帝国主義が後者の思想によってそれぞれ基礎づけられているという[56]。そのうち，民族主義の旨について，梁啓超は「我が族の自由は他族に侵されないようにする」と同時に「我が族も他族の自由を侵さない」ことにあり，自由と独立の相互承認が国内秩序と国際秩序を貫き，「道理即権力」の命題を成立させた点を非常に高く評価し，民族主義が世界で最も公明正大で公平な主義であると称える[57]。一方，十九世紀後半になると，発展の極限に民族主義が民族帝国主義に転化した。天授の平等な民権が民族主義の原動力であったのに対し，強者のみ享受できる権利，いわば「強権」が民族帝国主義の原動力となり，優勝劣敗が常態と見なされ，「権力即道理」という命題に象徴されるように，国際秩序における「力」の観念が導き出されたのである[58]。また，たとえを用い，民族主義は胚胎から児童まで欠かせない材料であり，民族主義から民族帝国主義に変わるのは，成人以降生計を立て事業に乗り出す際にすべきことであると言い，民族主義の段階を経ていない国は国とは言えないという[59]。

さらに，梁啓超は，「現今世界各国の大勢を総覧し，その政略の出自と勢力が中国に集中した理由を推察し，中国の国民の自立すべき道を追求する」ことを旨として，「論民族競争之大勢」を書いた[60]。これは当時彼の国際政治認識をよく示した一文である。彼によれば，マルサス（Thomas Robert Malthus　1766–1834）の人口論とダーウィン（Charles Robert Darwin　1809–1882）の進化論の盛行によって，殖民政略が内治維持の第一の肝要なこととなり，「野蛮な挙動」が「文明の常規」となり，「弱肉強食の悪風」が「天経地義の公徳」となり，世界主義から民族主義へ，さらに民族帝国主義へと変わってきた近世列強の政策は，「事理」のやむを得ないことであるという[61]。国際的生存競争の舞台がすでに中国に移ってきたため，今日中国を救うために，ほかでもなくまず民族主義国家を建設すべきであることを強調し，地球上最大の民族として進化に適合する国家を建設できれば，「天下第一帝国」の美

称はだれに奪われるものか，と強い自信を示している[62]。梁啓超は，「まず民族主義時代を経てはじめて，民族帝国主義時代に入ることができる」ことを再三強調し，今日民約論の「有権」・「自由」をまず中国の人々に知らせることこそ救国の良薬であると唱える一方で，中国には民族帝国主義という段階にたどり着く日が必ずやってくるし，西洋人が百年を経てはじめて達したこの段階に，中国人は十年あるいは二十年で達しうるかもしれないと述べる[63]。

ここにあるのは，いわば「強権派」の理論（生存競争・優勝劣敗を唱える進化論）を用いて「平権派」の課題（民族主義国家の建設）を遂行しようとする梁啓超の姿にほかならない。彼が特に心配しているのは，次の二つの傾向である。第一に，民族主義がまだ胚胎していない中国の現状を顧みず，十八世紀以前の思想を墨守し，進化の公理に対抗しようとする傾向である。第二に，新説を受け入れ，中国の現実の地位を顧みず，軽率に十九世紀末の思想を治国の鉄則とする傾向である。前者にしたがえば，卵を石にぶつけるようなことになる。一方，後者にしたがって欧州各国の政府万能説を中国に移植したならば，中国は永遠に国になる機会を失ってしまう。結論として，「他人が帝国主義をもって侵入してくることの恐ろしさを知り，速やかに我が固有の民族主義を養成してそれに抵抗することこそが，今日我が国民の努むべきところであり」，民族帝国主義に対抗するために民族主義の養成をしなければならないのである[64]。したがって，梁啓超の生涯において，立憲君主制に傾く時期もあれば共和制に傾く時期もあったのは，単に彼の変わりやすい性格によるというよりも，むしろ彼にとって，この両者は中国を民族主義国家に転換させる大目標を達成するための手段に過ぎなかったからなのである。そのどちらがより適切かは，その時期の民徳・民智・民力など，民衆の「強権」（強者のみ有する「自由権」でもある[65]）を彼は見定めた上で判断したにほかならない。

四　内藤湖南の中国史論と比較しながら

中国史叙述というと，日本における東洋史学の創始者と目される内藤湖南の名をまず思い浮かべるであろう。湖南の唱えた中国「唐宋変革，宋代近世」論（唐代と宋代の間にあった大きな歴史的な変化を中世から近世への移行と位置付け，宋代以後を近世と捉える視点）は，いわゆる京都学派の時代区分として現在でも有力な説となっている。広く読まれた彼の『支那論』（1914 年）において，湖南は中国史を踏まえながら，辛亥革命で滅んだ君主独裁政治は宋代に始まり，それ以前は貴族政治の時代であることを明らかにした上，宋代以降の社会の各方面における近世的発展のなかで見られた庶民の台頭（「平民主義」），地方自治の伝統（「郷団組織」）こそが共和制の基盤たり得るとし，一種の「聯邦共和制」をあり得べき政体とした[66]。

内藤湖南（1866–1934）

世紀転換期において，ともに中国史の書き直し，新たな中国史全体像の構築にパイオニアとして貢献した二人ではあるが，時代区分をはじめ，中国史像をめぐる梁啓超と内藤湖南との議論を比較すると，次のような共通点と相違点が挙げられる。

第一に，二人とも，循環論ないし退化論を拒否し，尚古史観にも与せず，十九世紀的進化論を受容した進歩史観の立場に立つ[67]。そして，ともに，各種の政体を単なる類型論で捉えるのではなく，貴族政治から君主専制政治へ，さらに共和政治への転換を，洋の東西を問わず，人類社会の必ず経験しなければならない段階，また不可避の歴史発展の趨勢として捉え

る[68]。しかし，こういう図式を中国史に具体的に適用した際，二人の間に相違が生ずる。

梁啓超は，堯舜の時代を貴族政治の全盛期，周代を封建政治の全盛期と見なし，秦漢帝国の統一によって「封建」が「郡県」に一変し，中央集権的君主専制政体が確立され，その後大した変化のないまま，清末「列国並立」の変局まで二千余年一貫して続いてきたと見る[69]。その間六朝と元代だけがやや特殊であるとする。前者の場合，貴族は存在していたとしても貴族政治は存在したとは言えず，貴族の地位は単なる「虚名」に過ぎないのであり，後者の場合，かりに貴族政治だと言えても，元代の貴ぶものは我が民族の貴ぶものではないし，元代の貴族が元代の専制を擁護すること自体も専制政体の進化であるゆえ，全体的に見れば，それは秦から清末までの中国の専制政治進化の歴史的発展を少しも損なうことはなかったという[70]。梁啓超は，中国史上有意義な革命は三回しかないと見ており，黄帝・堯舜以来の部落政治を打破した周代の革命，三代以来の貴族政治を打破した秦漢の革命，君主専制政治を打破した辛亥革命，の三つがそれであるという[71]。

一方，湖南の見るところ，殷周から隋唐までおおう貴族政治は，周代において第一次の，六朝・隋唐において第二次のピークに達した。周代の貴族政治は秦漢帝国の統一によって一種の君主独裁の傾向を帯びてきたが，この古代の君主独裁政治はある種の屈折を経験して自ら貫徹できず，後漢あたりから第二次の貴族政治の段階に入り，六朝・隋唐に最も盛行したのである。そして，「貴族政治から君主独裁政治に入つたのは，どこの国にも見られる自然の順序である」[72]と考える湖南にあっては，唐と宋の間に政治・社会・文化の各方面において大きな変革が起こり，「宋代は唐から五代迄の間に，古い社会上の根柢が悉く打ち毀されて，さうして貴族政治の時代から平民政治時代に入りかけて来た時であつて，君主の側に於ても其権力が従来よりも旺になり，人民の方に於ても其位置が確実になつて，さうして其中層に位して居つた貴族の勢力が全く無くなつて来た」[73]という。すなわち，宋代に君主と平民との間に横たわった貴族という中間の階級がなくなり，貴族政治が完全に姿を消した結果，真の意味での君主独裁政治が確立され，中国が「近世」に入ったのである[74]。それと同時に，君と民が直接にかかわるようになり，権力が下のほうに移動した結果，平民の台頭，文化階級の興起など，後に起こった辛亥革命，そして共和政治の到来につながっていく現象が目立つようになった[75]。

秦と宋とのいずれに区切りをつけるかにおいて，二人の間に相違が存在するにもかかわらず，君主専制政治が貴族政治に取って代わった時点を中国史上の大転換期と見なした理由は，本質的に同一であると言える。したがって，この意味で秦にすでにその転換を見出した梁啓超は，同じ基準を持って時代の下った宋にまた転換を見出すわけはない。

さらに，二人とも共和制が君主専制に取って代わることを歴史的趨勢と認めるが，専制主義から中国が離脱するに際し，未来のビジョンとして立憲君主制か，それとも共和制か，それとも暫時的「開明専制」か，と「民情」や「民度」など社会的条件による政体の選択に逡巡のあった梁啓超に比べれば，明治日本の歩みを目のあたりにし，また辛亥革命を機に中国に大きな期待を抱いた湖南は，梁啓超よりも純化された段階論的な視点に立っている。

第二に，二人とも，基本的に貴族政治と君主専制政治を対立概念として対置し，貴族制は克服すべき制度であり，そこから君主専制への移行が必至であるとするが，貴族政治と君主専制政治に対する二人の評価がやや異なっている。これもそれぞれの時代区分に影響したのである。

貴族政治について，梁啓超はそれを「社会の障害物」であり，最も不平等で不自由な政治体制であると認識する一方，「そうとは言え，害のあるところに，利も往々にして伴い」，貴族政治の時代は民権がやや伸張した時代でもあると二面的に捉えている[76]。「欧州にこの種の特別階級が存在したおかげで，進化の障害どころか，進化の媒介となったことは，その政治革新が成功した一つの原因である」という[77]。しかし，秦以来中国に階級がなかった結果，「無形の専制」・「間接の専制」のもとに「野蛮の自

由」が生じ，民衆の反発力が足りなくなったのである[78]。とりわけ，出身と関係ない科挙制度の存在で，中国では世襲制や身分制とは無縁になる反面，支配者と被支配者との間の競争が停止し，「奴性」（奴隷根性）が浸透してしまったという。一方，湖南は貴族階級を君主と民衆の間に横たわっている存在と見なし，この中間の階級の撤廃によって，両端の階級が接近するようになり，逆説のように見えるが，「時としては平民発展時代が即ち君主専制時代」[79]であり，君主の統治が強化されたと同時に，平民も勢いを増してきたという。貴族時代の崩壊によって，貴族に対して実際の権力を持たない君主も，貴族に政治権力を専有された平民も，貴族から解放され，君主と平民の間の貴族という階級が抜け落ちたため，そう言えるのである[80]。「やはり科挙によつて門閥の弊害を矯めんとした意味はある」[81]。ここで科挙官僚の大量出現が，湖南の宋近世説を支える根拠の一つとなった。

そして，君主独裁政治について，湖南は一層その二面性に注目している。彼は，宋代に確立され，明清に強化された君主独裁政治の弊害と行き詰まりを指摘する一方，平民主義の台頭をはじめとするそのなかに潜んだ近代性に注目し，辛亥革命後の中国は必ず共和制に落ち着くという確信に至ったのである。これに比べれば，梁啓超は貴族政治の進歩性を認めながらも，君主専制政治のもとで民衆には自治がなく，この体制が立憲政治の障害であるとの側面を強調する。梁啓超にしてみれば，君主専制政治に取って代わるべき体制は，立憲政治（立憲君主制あるいは共和制）である。政治主張が幾たびも転換したことへの批判に対し，彼は次のように述べ，「政体だけを論じ，国体を論じない」，すなわち「つねに現行の国体のもとで政体の改革を求めようとした」彼なりの姿勢を徹底させようとしたのである。

> 私が思うに，国体と政体とはもともと一体ではありません。憲政を行うことができさえすれば，君主制であろうと共和制であろうと，どちらでもよいのです。逆に憲政を行うことができないのであれば，君主制であろうと共和制であろうと，どちらもダメなのです。両者に選ぶところが無いとなれば，むしろ現在の基礎をそのまま生かして，理想の政体をその上に建設することをおもむろに図っていく方がよいでしょう。これこそ私の十余年来の持論に一貫した精神にほかなりません。そもそも天下は重器です〔『史記』伯夷伝〕。器の置き場所をしばしば移すと，それだけ傷がたくさんつき，私の不安も増すことになります。それゆえ，つねに理想の政体を促進しようとしながら，同時に現在の国体を尊重しようとしているのです。その理由はほかでもありません。政体の変遷は，その現象がつねに進化的であるのに対し，国体の変更は，その現象がつねに革命的だからです。革命によって国の利益や民の幸福が達成されるなどと，私はこれまで聞いたことがありません。それゆえ，私の最初から共和制に反対したこともなければ，君主制に反対したこともないけれども，しかし，どんな時であろうと必ず革命に反対してきました。それは革命以上に国家の大いなる不幸は無いと思うからなのです[82]。

また，中国史上，いつ貴族政治が終焉を迎え君主専制政治に入ったのかも，二人にとって大問題である。ここで，梁啓超は専制政治を，湖南は貴族政治を，広義に捉えることが特徴的であり，そのため各時代の長さも自ずと異なってくる。梁啓超にとっては，貴族政治も君主専制政治も広義の専制政治の枠組みのなかに入っており，君主か民主かその段階の状況にもよるが，専制政体と対照的な立憲政体こそが彼の一貫して追求する理想像である[83]。しかも，彼は，欧州と比べた場合，一面では段階論では捉えきれない「時代の長短」の裏に潜む中国の特殊性，すなわち貴族のない君主専制の超長期的持続にも十分注目していた。一方，湖南の言う貴族政治には，氏族政治も外戚政治も名族政治も含まれているが，典型とされる六朝・隋唐の名族政治がそれまでの貴族政治と段階を異にし，封建世襲貴族から官僚貴族へと変化していったことが彼の目にとまっている。中国の特殊性に注目する点は梁啓超の思想には通じるとはいえ，進化論という法則の普遍性を信じている梁啓超と比べれば，湖南のほうがより各国の

独自性を重視している。こういった姿勢は彼の若い頃の論説にも読み取れる。中国について述べているわけではないが，明治の欧化主義について，彼は次のように批判を加えているのである。

> 曰く日本は後進国なり，宜く先進国の為す所を学ぶべしと。此一言は実に日本全国を支配せる所の格言なりき。間々学理に渉りて之が説を下せば則ち亦云ふ，社会の進化は一定の規則あり，東西洋何れの国，何れの社会を問はず必ず此規則を履で発達する者なり，日本社会の発達は如此々々なり，此れ正に欧州諸国と大同小異なり，欧州の制度文物を摸擬するに於て何の妨かあらんと。其細目に至りては，或は独逸を学ぶべしと云ひ，或は英国に法るべしといひ，紛々として互に喧争すれども，其摸擬主義たるは則ち一なり。誰か知らん社会の発達は一定の原則の下に支配せらると雖も，此原則をして緩急正変各其作用現象を異にせしめ，以て特別なる国体特別なる人民を形るの刺衝因縁，他に数多之あるを[84]。

第三に，ともに進歩史観を持つ二人ではあるが，歴史発展の原動力について，梁啓超は「生存競争」による「優勝劣敗・適者生存」を自然界から人類社会まで貫徹する鉄則とし，天賦の権利は存在せず，存在するのは強者の権力（「強権」）のみであり，「強者」・「適者」になるために繰り広げられた変革こそが歴史を推進するものであると考えているのに対し，湖南は文化発展における「内」からの作用と「外」からの反作用，いわば「波動」の連続で中国史が前進していくと捉えている。この見方は，中国文化発展史上周辺民族との関係を論じる際の二人の姿勢にもよく現われている。

梁啓超は，漢民族と異民族，ないし周辺国家との関係に着目し，中国史を「上世」・「中世」・「近世」に三区分し，それぞれを「中国の中国」・「アジアの中国」・「世界の中国」と特徴付けている[85]。なぜ近世になって中国と欧州との先進―後進関係が逆転したのかというと，梁啓超はそれはすべて競争の有無によるものであると見ている。中国が停滞した重要な原因の一つとして，周辺の蛮族に取り囲まれていることに加えて交通が不便であることを挙げ，彼は次のように述べている。

> 大抵一つの社会の進化は，必ず他社会と接触し，その文明を吸収し自分の固有の文明と調和して，新しい文明が出現するものである。欧州各国はつねに進化してやまないのに対し，我が国が数千年停滞して進まないゆえんは，他社会との接触の多寡，難易によるものである[86]。

つまり，中国と周辺の異民族との間に，紛争は存在していても競争は存在しなかった。そして，異民族との文化的格差があまりにも大きいため，中国はつねに一種の唯我独尊の気概を持ち，自信，そして自大，さらに自画自賛になってしまった結果，進歩の道が閉ざされたのである。それのみならず，異民族が幾たびも侵入してきて中国文明を破壊したりしたため，抵抗する側は，固有のものを保守するのに急いでしまう結果となった[87]。

一方，湖南は，中国はいつも非中国的世界と地を接しており，絶えず周辺とは緊張関係にあり，中国史は自ずと世界的環境を作っており，周辺との交流のなかで徐々に中国文化が形成されていったと捉える。ここで言う交流には，貿易・戦争など様々な形が含まれている。湖南は独自の時代区分を行なった際，次のような議論を展開している。

> 真に意味ある時代区分を為さんとするならば，支那文化発展の波動による大勢を観て，内外両面から考へなければならぬ。一は内部より外部に向つて発展する経路であつて，即ち上古の或時代に支那の或地方に発生した文化が，段々発展して四方に拡がつて行く径路である。宛も池中に石を投

ずれば，其の波が四方に拡がつて行く形である。次に又之を反対に観て，支那の文化が四方に拡がり，近きより遠きへ，其の附近の野蛮種族の新しき自覚を促しつゝ進み，其等種族の自覚の結果，時々有力な者が出ると，それが内部に向つて反動的に勢力を及ぼして来ることがある。これは波が池の四面の岸に当つて反動して来る形である。而してこれは常に同じ年数を以て続いて反動して来るのではなく，波のうねりの如く間歇的に来り，それが常に支那の政治上その他内部の状態に著しい感化を與へて居る。第三には，第一第二の副作用として，時々波が岸を越えてその附近へ流れ出ることがある。陸上では中央亜細亜を越えて印度や西域地方に交通を開き，その際また印度西域の文化を支那に誘致し，後には海上より即ち印度洋を経て西方諸国に関係を有つに至り歴史上の世界的波動に大なる交渉を有つやうになるのが即ちそれである(88)。

つまり，最初は，池に投げ込んだ石の波紋のように，中国文化が外に向かって広がっていく時期，ついでその波紋が岸から跳ね返ってくるように，周辺民族が刺激を受け自覚して反動を起こし中国内部に影響する時期である。そして，文化というものが大きな波動をなして外に向かうときと，内に向かうときがあり，作用と反作用の繰り返しによって歴史が推進されていったのである。「文化中心移動説」を唱えるとき，湖南は漢代の匈奴，五胡十六国や遼，金，元や清の時代の北方民族を取り上げ，もし異民族の刺激がなければ「支那民族は其の儘衰死したかも知れない」が，こういった「若々しい民族の混入によつて，支那の生命を又若返らして，唐時代の如き非常に華やかな文化を復活した」し，またその後「支那は民族生活の様式を一変して，国民政治の生活から世界的文化生活に移つて行つた」のである，とその持論を展開している(89)。ここで湖南は，世界史的発展の論理を借りて，中国文化の形成・発展・中毒・若返りの過程を描写している。彼は，中国史を決して自己完結したものとして捉えていない。むしろ開かれた立場に立ち，漢民族と異民族，中国的世界と非中国的世界の関係に目を配りながら，文化を基準に中国史の発展段階を設定し時代区分を行なっている。しかも，その議論の時代背景には歩みを速めた日本のアジア侵出があった。

要するに，湖南は，異民族を中国文化の「中毒」を分解し，その停滞に刺激を与え，その発展を促進する一種の力として捉えているのに対し，梁啓超は，逆にこれに中国を停滞させ保守化させた原因を求めているのである。

ここで，梁啓超の論文「歴史上中華国民事業之成敗及今後革進之機運」を批評した湖南の論説「支那人の観たる支那将来観と其の批評」を見てみよう(90)。湖南は梁啓超の思想におけるいくつかの論理的「矛盾」を指摘した上で，自ら「支那の運命に関する予言を試み」ている(91)。そのうち，中国文化と周辺との関係をめぐる議論に注目する。

梁啓超の言う「支那固有民族が其文化を以て漸次他の民族を包括してゐる」というのは事実だが，「それと同時に，其の勢力の中心，文化の中心も漸次移動しつゝあることを考ふべきもの」である。しかも，「文化中心の移動は必ずしも勢力中心の移動と平行せない」と，湖南は持論の「文化中心移動説」を展開する(92)。さらに，「梁氏も述べてゐるが，支那国民は世界主義の特性を有つてゐて，超国界の観念を抱いてゐることは慥に事実であるが，超国界の観念を応用する時は，今日支那の国家に包括せられない日本とか朝鮮とかも現代の支那国民と同一のものとして考へ，支那国民の勢力中心，文化中心の移動は其処まで及ぶものと考へるべきものである」(93)。そして，「勢力中心」の一面では，「朝鮮の如く勢力中心を形づくるに不適当な民族は姑く措くとして」，日本は「支那国民と一つに包括された圏内で勢力中心を形づくるべき資格」がある(94)。一方，「文化中心」の一面では，「日本は現に古き支那文化と新しき西洋文化とを採用して，日本文化なるものを形づくらんとしつゝある現状なれば，それが完成の暁には，今日よりも以上に支那文化に影響して，東亜細亜全体を一つの世界とした圏内に於て，之が中

心となるかも知れない」[95]と述べて，日本が東洋文化の中心になることを示唆する。さらに，湖南は「支那人に最も不適当なる政治経済上の仕事は他国民が代つて之を管理し，固有の支那国民は夫よりも高等なる文化即ち趣味性の産物たる芸術を完成せんとする径路にある」とし，「支那国際管理論」を熱烈に提唱した[96]。

第四に，二人とも一国史に閉じこもらず，中国を取り囲む世界，そして世界における中国の位置付けに目を配りながら，世界史のなかで中国史を捉える視角を持っている。しかも，中国がある時期まで他の国に先んじて「近世」に入るような先進性を持っていたことをともに認めている。ただ異なっているのは，梁啓超は，秦漢以降競争が断絶したため中国が欧州に遅れを取ったが，それまでは中国のほうがむしろ進んでいたと見ているのに対し，湖南は中国の発展こそ正則であると捉え，現在でも中国は文化の面で世界の先頭に立っていると見なしているのである。

梁啓超は，次のように述べている。

> わが国は開化が最も古いことで世界に知られている。三千年前，西洋ではまだ草木が生い茂り野獣が出没していた頃，わが文物はすでにその中世史に比肩し得るほど発達した。しかし，慢心と無精のまま旧習を墨守しながらいまになって三千余年が経ってしまったせいで，所謂家族の組織，国家の組織，村落の組織，社会の組織，ないし風俗，礼節，学術，思想，道徳，法律，宗教など一切の現象は，依然として三千年前とは変わっていない[97]。

つまり，彼の見るところ，二千余年前に貴族制を清算した中国は，比較的最近まで貴族制を温存した西洋に比べ，政治進化の過程で遥かに先行したが，政治的・思想的統一の結果，競争がなくなり，中国が長期にわたる停滞状態に入ってしまい，現時点で中国と西洋における先進と後進の関係の逆転をもたらしたのである。

一方，歴史のある時期まで中国が西洋諸国よりも先行していたという意識を梁啓超と共有する湖南は，中国史の発展を一本の樹にたとえ，それ自身が一つの世界史を形成しているという立場に立ち，中国と欧州は文明の進歩の上で，大局的には同じ歩みを進んでいると強調する。彼は次のように述べている。

> 支那文化発展の全体を通観すれば，宛も一本の木が根より幹を生じ葉に及ぶが如く，真に一文化の自然発達の系統を形成し，一の世界史の如きものを構成する。日本人も欧州人も，各々自国の歴史を標準とする故，支那史の発展を変則と見るが，それは却つて誤つて居り，支那文化の発展は，文化が真に順当に最も自然に発展したものであつて，他の文化によつて刺激され，他の文化に動かされて発達して来たものとは異つてゐる[98]。

そして，湖南は，貴族階級のような中間的社会勢力の一掃という中国では宋代で完了した「近世」的課題を，日本はようやく明治維新で果たしたのであると考え，次のように論じている。

> 支那の政治上の歴史は遥に日本より長い事は勿論であるが，其長い丈けに日本の政治歴史が未だ嘗て経過せざる所の時期を既に支那に於ては経過して居るのである。（中略）日本の近頃の政治上の過程は，若し之を支那に比較すれば，宋代に比較す可きものである。（中略）歴史から云ふと，立憲政治であると其他の政治であるとを以て政治上の時期を定める訳には行かない。さう云ふ風に

考へると，支那の政治上の時期は，今日の列国の中では，最も先きへ進んで居るので，それが即ち亦支那の政治の今日の弊害を来した最大の理由であるかも知れない[99]。

おわりに

以上，梁啓超における中国史叙述について，まず，康有為の「三世進化説」，厳復の『天演論』，日本経由の進化論との三つの「出会い」を詳細に分析し，ついで，梁啓超の提示した政体進化の図式および中国史への具体的な適用を解明した。さらに，それに基づく新たな世界像の提起と第二の「戦国」論を検討し，最後に，「唐宋変革，宋代近世」論で広く知られている内藤湖南の中国史論と比較しながら，梁啓超の中国史論の特徴を浮き彫りにさせた。「専制」の進化と「政治」の基準の二つこそが梁啓超における中国史叙述のキーワードなのである。

以下，梁啓超における中国史叙述をより広い文脈に位置づけるために，①「改良」と「革命」，②「学問」と「政治」の二つの問題を検討して本論文を終わらせたい。

① 「改良」と「革命」

1902 年という年は，梁啓超の思想を語る際，重要な意味を持つ年である。というのも，この年に，『新民叢報』（昨年停刊となった『清議報』の後継紙）と『新小説』が相次いで創刊され，前者に「新民説」・「新史学」・「論中国学術思想変遷之大勢」，後者に「論小説与群治之関係」・「新中国未来記」，など一連の重要な文章の掲載が始まったからである。また，それにとどまらず，日本亡命後，「革命」論に急接近し，「自由」，「共和」，「破壊」を唱える梁啓超は，この年に「保教非所以尊孔論」などを発表し，師の康有為との間に立場や意見の齟齬が表面化し，思想上もっとも急進的な時期を迎えるようになったのである。

一方，梁啓超が「破壊」を唱えるこの時期は，革命論や革命派がようやく形を整えて出現する時期でもある。翌年の 1903 年は，清末の革命運動にとって一つの画期をなす象徴的な年である。この年を境目に，それまで未分化のまま共同行動をとってきた革新勢力は，清朝体制のもとでの改革を志向する「改良派」と，革命思想の伝播に力を入れ，満洲族王朝の打倒を声高く鼓吹する「革命派」との両派に判然と分かれ，両派の対立が次第に激しくなった。それは，鄒容（1885–1905）の『革命軍』，陳天華（1875–1905）の『猛回頭』・『警世鐘』，章炳麟（1869–1936）の「駁康有為論革命書」など，一連の重要な革命文献の出版に象徴される[100]。こういった勢いに乗って，1905 年に，革命諸団体が合流・連合し，孫文（1866–1925）を指導者とする中国同盟会を成立させ，機関紙『民報』を創刊したのである。

明治日本を介して多くの西洋思想と出会った梁啓超は，中国の現実と正面から向き合おうとした時期，よりよい解決策を見つけるために，現状を変える手段や政体，国家モデルの選択などにおいて，実は深い迷いを見せた。その様々な逡巡を示した一つの典型例が，彼の取り組んだ未来記型政治小説の『新中国未来記』（1902 年）である[101]。

「私は五年も前からこの書を著そうとしてきた。（中略）こうした書物は中国の前途にとって大いに裨益するところがあると確信していたので，日夜これを志してやまなかった。（中略）『新小説』を出版したのは，もっぱらこの作品を発表したいと願ったからである」と「緒言」にあるように，梁啓超は，戊戌変法の前から既に中国のあるべき姿を構想し始め，この『新中国未来記』を発表するのに雑誌『新小説』を発刊したほどの意気込みを見せたのである[102]。この作品はフィクションではあっても，「作品のなかの寓言については，ずいぶん思考をめぐらせており，いい加減にやってはいない」という作者自身の言葉からもわかるように，単なるフィクションで終わるものではない[103]。それは，「今日群治〔社会〕を改良しようとすれば，必ず小説界革命より始めねばならない，新民しようとすれば，必ず新小説

より始めねばならない」と梁啓超自らが提唱した「小説界革命」の実験であるだけでなく，彼自身をも含む，混沌とした中国の未来に対して不安や戸惑いを持ちながら変革を求めようとした多くの中国人の思想的葛藤の記録でもあると考えられる[104]。

小説の内容は，ドイツに留学して「国家学」に啓発され，立憲君主制を目指す冷静な「改良派」の「黄克強」と，フランス留学経験を持つルソー思想の信奉者で「革命派」の熱血漢の「李去病」との間で展開された中国の将来の進路をめぐる議論が，六十年後の中国を舞台に「孔覚民」という老博士の口を通じて回想されていくというものである。小説の描いた六十年後の中国では，「維新」が成功し，「羅在田」が大統領に就任し，新しい国家が建設されている。ここで言う「維新」は，「革命」に対しての「改良」という意味ではなく，暴力による旧政権の打倒によらず，英明なる皇帝の自発的退位によって平和的な権力移譲が行なわれ，共和制が成立することを意味する。この言葉自体にも梁啓超の複雑で矛盾した心理がうかがわれるであろう。

四十数回にわたる二人の議論の最後で，梁啓超は「黄克強」の口を借りて，「結論」として次のような折衷的な意見を述べる[105]。

> 実行ということになると，もちろん多くの複雑な方法があるが，準備工作の点では，道は一筋しかありえない。今日，われわれはどうあっても，なんとかして国中の志士を連合し，国中の国民を訓練し，事をなす時が来たならば，ただ臨機応変にやってゆく。ただし，万やむを得ざる場合の外は，決して軽々しくかの破壊の道には進まないのだ[106]。

こういった「黄克強」の見解に対して，「李去病」も結局うなずいて賛成する。実際，康有為にしろ，梁啓超にしろ，現皇帝のもとでの立憲君主制を目指す「改良派」は，究極的に共和制の実現を目標とする一面があるとは言え，あくまでも段階論をとっており，現段階では立憲君主制の導入を主張した。仮にこの時期の梁啓超には革命志向があって急進的な発言をしたとしても，「国中の志士を連合し，国中の国民を訓練する」とあるように，立憲論者と革命論者とを問わず「愛国者同士」が「新民」という課題に一致協力して取り組んでいく，という「実行」の段階に入る前の「準備工作」をまず行なうべきことの重要性が強調されている[107]。また，暴力による共和制の即時実現を主張する「革命派」の目標達成手段には賛成していないが，武力で問題を解決するという方法を完全に放棄したとも言えず，ただ，それは最小限に食い止められるべきだとする。

さらに，主人公二人の議論の終わりに，梁啓超は，回想役の「孔覚民」の口を借りて二人の理想的な交友関係を述べている。

> 彼らは公のことではこんなに言い争うけれども，私情においては依然として，互いに親愛しあい，意見の相違によって仲が傷つけられるようなことはこれっぽちもありませんでした。最近，小学校の教科書はみな「黄と李と牀を連ぬ」という一条を採っていますが，それは彼ら二人の友情を述べて，児童に交友の模範を教えているのであります。諸君，もしこの二傑を崇拝しようと思うなら，どうかこういうところからじっくりと崇拝していっていただきたい。手本としていっていただきたい。そうすれば，わが中国の前途も，きっと日進月歩なのであります[108]。

つまり，「改良派」と「革命派」は，手段や国家モデルの選択において意見の分岐が存在するものの，必ずしも相容れない存在ではなく，むしろ厳しい国際競争を勝ち抜くために，「愛国」という大前提のもとで中国の富強の道を模索していた憂国の志士であると同時に戦友でもあると捉えられている。作品中，「改良」と「革命」の是非をめぐって激論を展開し，異なる政見を持ちながら親密な友情を持

つ「黄克強」と「李去病」は，ともにこの時期の梁啓超の分身だったのであろう[109]。この時期の彼から見れば，「改良派」も「革命派」も，「準備工作」の段階においては，互いの立場の相違を超えて共闘することが可能だったからである。もちろん「黄克強」も「李去病」も実在の人物ではない。しかし，フィクションであるがゆえに，この「問答体」でしか表現しようのない深いディレンマに対峙せざるをえない，揺れ動いた心象風景と苦闘した姿をより一層よく浮き彫りにしたのである。

② 「学問」と「政治」

世紀転換期とは，政治・学術・思想・文化など，様々な面において，東と西，新と旧が入り混じりながら錯綜を極めた時代であり，伝統から現代への過渡の時代でもある。梁啓超も「時代の子」であった。毀誉褒貶の分極のなかで，その後の梁啓超像は描かれてきたと言ってよい。

中国近代の最大のジャーナリストとして，梁啓超が，「鼓民力」・「開民智」・「新民徳」といった「新民」の課題を，情感あふれる筆致で熱く鼓吹し，西洋の新しい思想を日本経由で中国に伝播していくのに，大きな役割を果たしたことは，だれも否定できない事実であろう。例えば，郭沫若（1892–1978）は，波瀾に満ちた時代相を背景にやや叙情的に描いた自伝の中で，次のように記している。

> 彼〔梁啓超〕の新進気鋭の言論の前で，ほぼすべての旧思想・旧風習が狂風のなかの枯葉のように，完全にその精彩を失った。二十年前〔二十世紀初頭を指す〕の青少年は，賛成・反対を問わず，彼の思想あるいは文字の洗礼を受けていない人は一人もいなかったと言ってよい[110]。

そして，梁漱溟（1893–1988）は，梁啓超の思想から受けた大きな感銘を，自らの精神を鍛え，深め，成長させる糧として捉えている[111]上で，その時代における梁啓超の甚大な影響力について，次のように述べている。

> 任公〔梁啓超〕先生の全盛時代にあたって，広大な社会は，ともにその啓発と指導を受けていた。その勢力の普遍さは，彼の前後あるいは同時代のいかなる人物 —— 例えば，康有為，厳幾道〔厳復〕，章太炎〔章炳麟〕，章行厳〔章士釗〕，陳独秀，胡適之などなど —— でも及びのつかないものである。われわれは，彼のような広汎かつ有力な影響を生じさせた人を見たことがない[112]。

一方，戊戌変法以来の中国近代のほとんどの政治活動に直接的・間接的に絡んでいた梁啓超は，「流質易変」[113]，「献媚小生，従風而靡」[114]，「売朋友，事仇讎，叛師長，種種営私罔利行為，人格天良両均喪尽」[115]とまで酷評された。それは，康有為の弟子で信徒であるにもかかわらず師と公然と対立するようになったり，君主立憲，保皇の立場から共和擁護，さらに開明専制に転じ，一時孫文らの革命派と極めて接近したのに結局それぞれ異なった道を歩むようになり，戊戌変法を裏切った袁世凱の政府に仕え，その閣僚を務めた後，袁世凱帝政反対のため護国戦争の先頭に立ったことなどに対して，世間の下した厳しい評価なのである。

梁啓超自身も，かつて学生に向かって，「袁世凱がいなければ，中国の歴史はこの様ではなかった。梁啓超がいなければ，中国の歴史もこの様ではなかった」と語った[116]。自己解剖の勇気をつねに持ち合わせていた梁啓超のこの発言は，一面では正確だったであろう。

しかし，梁啓超も一人の人間である。高い評価と厳しい批判，そのどちらもが彼個人の発言と行動によって生みだされたものである。切り分けがたい一個の人間，総体としての人間として捉えなければ，彼を真に受け止め，理解することはできない。彼に見られるのは，過渡期における歴史観と政治観の絡み合い，学問と政治のディレンマそのものである。

梁啓超は四書五経の教養と学識を身につけている一方で，進化論や民権思想など西洋の思想を積極的に採り入れ，自らの学問的骨格をつくり，知的基盤を固めた。また，儒学の伝統的な「学而優則仕」・「経世済民」の士大夫思想の持ち主であるが故に，自らの学識を生かして出仕するという自負心と，自らの力を発揮して国家を支えていくという気概を持っていた。彼は，思想や文化，学術などの面にわたる革新こそが「新民」の根本であると認識しているにもかかわらず，「舌下無英雄，筆底無奇士」とし，「今日の鉄血世界にあって筆舌で汝の責任を全うできるのか」と問いかけ，実際の政治活動に参加することによって，自分の志向や抱負をより直接かつ有効に実現できると信じていた[117]。彼は，学問・政治を有機的に統一させた王陽明（1472–1529）・曾国藩（1811–1872）のような人物を理想的であると考え，学者政治家の王安石（1021–1086）による時弊を救う変法にも敬意を示し，それまでの王安石評価を逆転させた[118]。

しかし，現実の政治世界は決して甘いものではなかった。若い頃から政治につねに情熱を燃やした梁啓超は，政治面で挫折を余儀なくされた。彼は，戊戌変法，袁世凱政府下の司法総長時代，段祺瑞閣内の財務総長時代，の三度にわたる大きな政治的失敗を喫した。挫折後自らの素質が政治家に向いていないことを自覚するようになり，学者でありつつ，時代状況に対して鋭利な筆を振るい，その時代の現実との張りつめた意識的対峙のなかで政治を論評する立場を貫き，政治を動かすのに一役買った。このように，学問と政治が緊張をはらみつつも結びついていたのである。

梁啓超の生涯は，『時務報』に携わったときから言論人として次第に名をはせ，一時期華やかな政治の表舞台まで駆け上がったにもかかわらず，最終的には自ら政治の世界と縁を切ることを決意し，学者としての道に徹底しようとしたのである。とはいえ，言論人―政治家―学者という彼の生涯についての時間的整理は，あくまでも時期ごとに彼の活動の重点を表しているに過ぎない。実際，「過渡時代」を生きた彼は，「経世致用」というモットーのもとで，伝統的学問と外来的知識を駆使しながら，国家と民族の運命を一身に背負っている，一人の士大夫にほかならなかった。この意味で，まさに学問と政治が生活の両輪をなし，「覚世」（世の中の人を覚醒させること）をもって始まり「伝世」（学術著作などがはるか後の世まで伝わること）をもって終わる一生だったと言えよう[119]。梁啓超自身の記述にも，学問と政治についての夢を描いている。

> 私は平生興味を生活の源泉としており，学問に対しても政治に対しても興味が濃いものです。しかし，両者を比較してみれば，学問に対する興味のほうがより濃いのです。私はつねに，やや清潔で明朗な政治のもとで学者としての生涯を送るのが許されればと夢見ています。ただし，もし私が政治について見もしなければ，聞きもしない，まったく無関心な状態にあるならば，それは責任逃避にほかならないとも常に感じています。二十代のときの勇気を回復させ，学者の生涯に貫徹する政論家になることこそ，私のやるべきことだと思っています。私は近い将来における真の国民運動の出現を切に待ち望んでいます。もし実現できれば，私梁啓超は，自身の舌と筆を駆使して〔演説と執筆の活動をもって〕下っ端の一兵卒となるべきです[120]。

梁啓超は，決して政治のみに没頭し学問を軽視する無知無学の政治家でもなければ，また，決して学問のみが趣味で現実社会と疎遠になった「象牙の塔」のなかの学者でもなかった。彼の理想像が結果として果たして実現し得たか否かはともかく，自らの理想に向かって行動し続けた彼の姿に，多くの人が激励されていたとは確実に言えるであろう。

（完）

注

（1）「新民説・論進歩」『新民叢報』10, 11, 1902 年 6 月 20 日, 7 月 5 日（『飲冰室文集点校』1, 581–582 頁）。別の題名は「論中国群治不進之原因」である。

（2）なお, 梁啓超による, 東海散士（実名は柴四朗）『佳人之奇遇』（未署名）, 矢野文雄『経国美談』などの漢訳が, 彼主宰の『清議報』によって中国に紹介された。後に梁啓超は中国初の政治小説『新中国未来記』を創作し『新小説』に連載した。それは,『佳人之奇遇』や『経国美談』, 末広鉄腸『雪中梅』などの影響を受けたとされる。山田敬三「漢訳『佳人之奇遇』の周辺 —— 中国政治小説研究札記」（『神戸大学文学部紀要』9, 1981 年）を参照。

（3）「新民説・論進歩」『飲冰室文集点校』1, 581 頁。

（4）同上, 582 頁。

（5）同上, 582 頁。

（6）同上, 582–584 頁。

（7）「中国専制政治進化史論」『新民叢報』8, 9, 17, 49, 1902 年 5 月, 6 月, 10 月, 1904 年 6 月（『飲冰室文集点校』3, 1648 頁）。

（8）同上, 1648–1650 頁。梁啓超の叙述を筆者が図式化した。

（9）同上, 1650 頁。

（10）同上, 1651 頁, 1655 頁。

（11）同上, 1651 頁。

（12）同上, 1654 頁。

（13）同上, 1655 頁。

（14）同上, 1655 頁。ここで言っている「専制」については, 梁啓超は狭義の君主専制を指しているとし, 広義だと貴族政体そのものも専制に属するという。

（15）同上, 1655 頁。

（16）同上, 1656–1659 頁。梁啓超は「堯舜為中国中央君権濫觴考」（『清議報』100, 1901 年 12 月 21 日）において, 堯舜当時は,「君権極盛時代」（旧い学者は, 堯舜当時すでに君主の権力が大きかったと見ている）でも「文明自由時代」（新しい学者は,「禅譲」に中国古代にすでに西洋の民主制度が存在したことを見出そうとした）でもなく,「貴族帝政」が発達し始めた時代なのであり, 黄帝から秦の始皇帝までの時代を「貴族帝政時代」と位置づける。「堯舜為中国中央君権濫觴考」の一篇は, 白河次郎・国府種徳『支那文明史』（博文館, 1900 年）「第五章　政治思想及君主政体之発展」から影響を受けたとされる。この『支那文明史』は, 梁啓超の「東籍月旦」（『新民叢報』9, 11, 1902 年 6 月 6 日, 7 月 5 日）に言及され, 高く評価された。

（17）同上, 1659 頁。

（18）同上, 1659–1660 頁。

（19）同上, 1660 頁。元代の身分制度について, 梁啓超は次のように詳しく述べている。「分国人為四階級之制：一曰蒙古人, 二曰色目人,（即非蒙古, 非漢族之諸小蛮族。）三曰漢人,（指滅金時所掠河北人民。）四曰南人。（指滅宋時所掠江南人民。）政権全在蒙古人, 色目人次之, 漢人, 南人最下。（南人尤甚。）」という。

（20）同上, 1660 頁。

（21）同上, 1661 頁。なお, 梁啓超には, 過去中国が欧州よりもだいぶ進んでいたのに, なぜ近世になって遅れをとられてしまったのか, という問題意識が強くある。例えば, 学術思想について, 彼は次のように述べている。「上世史時代之学術思想, 我中華第一也。中世史時代之学術思想, 我中華第一也。惟近世史時代, 則相形之下, 吾汗顔矣！」（「論中国学術思想変遷之大勢」『飲冰室文集点校』1, 215 頁）。

（22）同上, 1661–1662 頁。

（23）「論中国与欧洲国体異同」『清議報』17, 26, 1899 年 6 月 8 日, 9 月 5 日（『飲冰室文集点校』2, 769–770 頁）。

（24）同上, 770 頁。

（25）同上, 770–773 頁。

（26）以下, 政治を基準にした第Ⅰ種, 第Ⅱ種, 第Ⅲ種の区分とはやや異なり, 梁啓超には, 主に文化を基準にして学術思想の変遷をたどって行なった時代区分もある。第Ⅳ種：「論中国学術思想変遷之大勢」（『飲冰室文集点校』1, 216 頁）において, 彼は中国数千年の学術思想界を次のように時代区分をした。すなわち, 一,

胚胎時代（春秋以前）；二，全盛時代（春秋末および戦国）；三，儒学統一時代（両漢）；四，老学時代（魏晋）；五，仏学時代（南北朝，唐）；六，儒仏混合時代（宋，元，明）；七，衰退時代（近く250年）；八，復興時代（今日）。第五の仏学時代（南北朝，唐）と第六の儒仏混合時代（宋，元，明）についての梁啓超の具体的な叙述を知る由はないが，時代の命名からして，唐と宋との間に区切りを入れた理由には儒学（当時は宋学，すなわち理学）の要素が強くなったことが考えられるであろう。この数種の時代区分のうち，時代区分の理由などについて最も体系的かつ詳細に論じたのは，紛れもなく「中国史叙論」における第Ⅰ種の区分である。それは梁啓超の中国史叙述において大綱の役割を果たしている。そして，梁啓超の歴史思想と最も密接に連関するのは，前の三種の区分であるように思われるが，唐と宋との間に一つの区切りをつけ，今日こそ「復興時代」だと位置づけた第Ⅳ種の区分にも注目すべきである。なお，同じく唐と宋との間に大きな変化を見出した内藤湖南には，貴族政治から君主独裁政治への転換という政治的要素のほか，思想面における宋学の意義も重要だったであろう。

(27)「中国史叙論」『清議報』90，91，1901年9月3日，13日（『飲冰室文集点校』3，1626–1627頁）。

(28) 同上，1625頁。

(29)「国家思想変遷異同論」『清議報』94，95，1901年10月（『飲冰室文集点校』2，765頁）。なお，19世紀の「民族帝国主義時代」と区別するため，十八世紀前の君主一人が主体となった「帝国主義時代」を「（独夫）帝国主義時代」と梁啓超は名付ける（同上，767頁）。この時期の「新民説」においても，古代帝国主義→民族主義→民族帝国主義という構図を提示し，民族主義を中国で実行しようとするならば，民が新たになることを置いてほかにないという（「新民説・論新民為今日中国第一急務」『新民叢報』1，1902年2月8日。『飲冰室文集点校』1，548–549頁）。

(30)「堯舜為中国中央君権濫觴考」『飲冰室文集点校』3，1669–1670頁。

(31) それぞれ魏源の『海国図志』（李巨瀾評注『海国図志』中州古籍出版社，1999年，67頁），鄭観応の『易言』（夏東元編『鄭観応集』上，上海人民出版社，1982年，66頁），薛福成の「変法」（西順蔵編『原典中国近代思想史』2，岩波書店，1977年，97頁）に用いられた言葉である。なお，鄭観応の思想の全体像については，佐藤慎一「鄭観応について――万国公法と商戦（一）（二）（三）」『法学』（東北大学）47–4，48–4，49–2，1983年，1984年，1985年を参照。

(32)「論中国与欧洲国体異同」『飲冰室文集点校』1，773頁。

(33)「新民説・釈新民之義」『新民叢報』1，1902年2月8日（『飲冰室文集点校』1，550頁）。

(34)「新民説・論国家思想」『新民叢報』4，1902年3月24日（『飲冰室文集点校』1，558頁）。

(35) 同上，559頁。

(36) 同上，558–559頁。

(37)「中国史叙論・史之界説」『飲冰室文集点校』3，1620頁。

(38)「新史学・史学之界説」『新民叢報』1，1902年2月8日（『飲冰室文集点校』3，1631–1633頁）。

(39)「堯舜為中国中央君権濫觴考」『飲冰室文集点校』1，1669頁。

(40)「《清議報》一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」『清議報』100，1902年12月21日（『飲冰室文集点校』2，755頁）。

(41)「邪説暴行」・「処士横議」という言葉は，『孟子』からきたものであり，その後の春秋戦国のイメージを大きく規定したようである。「世衰道微，邪説暴行有作，臣弑其君者有之，子弑其父者有之。孔子懼，作春秋。春秋，天子之事也。是故孔子曰：“知我者其惟春秋乎！　罪我者其惟春秋乎！”聖王不作，諸侯放恣，処士横議，楊朱，墨翟之言盈天下。」（「孟子・滕文公章句下」朱熹著『新編諸子集成　四書章句集注』中華書局，1983年，272頁）。

(42)「中国専制政治進化史論」『飲冰室文集点校』3，1652頁。

(43) 春秋戦国に関する梁啓超の認識は，福沢諭吉のそれと極めて似ている。例えば，『文明論之概略』において，中国と日本との文明的異同を論じる際，福沢は中国史を次のように描いている。「支那にて周の末世に，諸侯各割拠の勢を成して，人民皆周室あるを知らざること数百年，この時に当て天下大に乱るといえども，独裁専一の元素は頗る権力を失うて，人民の心に少しく余地を遺し，自から自由の考を生じたることにや，支那の文明三千余年の間に，異説争論の喧しくして，黒白全く相反するものをも世に容るることを得たるは，特に周末を以て然りとす。〈老荘楊墨其他百家の説甚だ多し〉孔孟のいわゆる異端，これなり。この異端も孔孟より見ればこそ異端なれども，異端より論ずれば孔孟もまた異端たるを免かれず。今日に至りては遺書も乏しく

てこれを証するに由なしといえども，当時人心の活潑にして自由の気風ありしは推して知るべし。かつ秦の始皇，天下を一統して書を焚たるも，専ら孔孟の教のみを悪みたるにあらず。（中略）然り而して秦皇が特に当時の異説争論を悪てこれを禁じたるは何ぞや。その衆口の喧しくて特に己が専制を害するを以てなり。専制を害するものとあれば，他にあらず，この異説争論の間に生じたるものは必ず自由の元素たりしこと明に証すべし。故に単一の説を守れば，その説の性質はたとい純精善良なるも，これにて由て決して自由の気を生ずべからず。自由の気風はただ多事争論の間にありて存するものと知るべし。」（福沢諭吉著・松沢弘陽校注『文明論之概略』岩波文庫，1995 年，36–37 頁）。それに対して，日本は「神政尊崇の考と武力圧制の考と，これに雑るに道理の考とを以てして，三者各強弱ありといえども，一としてその権力を専にするを得ず。これを専にするを得ざれば，その際に自から自由の気風を生ぜざるべからず。これを彼の支那人が純然たる独裁の一君を仰ぎ，至尊至強の考を一にして一向の信心に惑溺する者に比すれば，同日の論にあらず。この一事に就ては，支那人は思想に貧なる者にして，日本人はこれに富める者なり。支那人は無事にして日本人は多事なり。心事繁多にして思想に富める者は，惑溺の心も自らから淡泊ならざるを得ず。」（同上，38–39 頁）という。つまり，結論として，こういった「自由の気風」があるか否かこそ日本と中国の差異であり，「この一事に就て文明の前後を論ずれば，支那は一度び変ぜざれば日本に至るべからず。西洋の文明を取るに日本は支那よりも易しというべし。」（同上，40 頁）という。果たして梁啓超がこの福沢の議論から影響を受けて自らの春秋戦国論を展開したかどうかはまだ言い切れないが，「自由書・文野三界之別」などは確実に『文明論之概略』に依拠したということ（石川禎浩「梁啓超と文明の視座」狭間直樹編『共同研究　梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房，1999 年，111–115 頁）からして，その可能性は十分にあると考えられる。

(44)「論支那宗教改革」『清議報』19，20，1899 年 6 月 28 日，7 月 8 日（『飲冰室文集点校』3，1334 頁）。

(45)「論中国学術思想変遷之大勢」『新民叢報』1902 年 3–12 月，1904 年 9–12 月連載（『飲冰室文集点校』1，222 頁）。

(46)「論支那宗教改革」『飲冰室文集点校』3，1334 頁。

(47) この観点は梁啓超の論説の随所に見られる。例えば，「論中国与欧洲国体異同」（『飲冰室文集点校』2，771 頁），「論中国学術思想変遷之大勢」（『飲冰室文集点校』1，239 頁）を参照。

(48)「《清議報》一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」『飲冰室文集点校』2，752 頁。

(49)「近世文明初祖二大家之学説」『新民叢報』1，2，1902 年 2 月 8 日，22 日（『飲冰室文集点校』1，397 頁）。

(50)「論中国学術思想変遷大勢」『飲冰室文集点校』1，221–233 頁を参照。周末における学術思想の勃興した原因として，梁啓超は，蓄積の豊富，社会の変遷，思想言論の自由，交通の頻繁，人材の重用，文字の簡略化，学術講演の隆盛の数点を挙げている。

(51)「保教非所以尊孔論」『新民叢報』2，1902 年 2 月 22 日（『飲冰室文集点校』3，1348 頁，1346 頁）。

(52) 同上，1346 頁。

(53) 同上，1346 頁。

(54)「論支那宗教改革」『飲冰室文集点校』3，1337 頁。この一文は，日本の哲学会における講演の内容を記したものであり，講演の目的は，康有為が明らかにした「孔子之真教旨」を紹介することにあった。六点にまとめられた内容のなかに，「進化主義であって保守主義ではない」との一点が入っている。

(55)「国家思想変遷異同論」『飲冰室文集点校』2，766 頁。

(56) 同上，766 頁。梁啓超はここで独特のスペンサー理解を示している。「平権派」と「強権派」の二つが挙げられているのは，「天賦人権」説から「強者の権力」論へと「転向」した加藤弘之の論が彼の念頭にあったであろう。しかし，スペンサーの進化論に精通した外山正一は，加藤はスペンサーを「誤解」しており，「加藤氏の進化主義は甚だ怪しきもの」であると批判している（外山正一「再び人権新説著者に質し併せてスペンセル氏の為に冤を解く」『明治文化全集』2，日本評論新社，1955 年，434 頁，437 頁）。この意味で，加藤の『強者の権力の競争』（1893 年）を敷衍した「自由書・論強権」（1899 年），ないしここの「平権派」—「強権派」の構図に示された梁啓超の進化論理解は，スペンサーに対する加藤の「誤解」をそのまま受け継いだものだったであろう。

(57) 同上，767 頁。

(58) 同上，767 頁。

(59) 同上，768 頁。

(60)「論民族競争之大勢」『新民叢報』2–5，1902 年 2–4 月。梁啓超が論説のなかで種本を挙げることはめった

にないが，この一篇の附言において，「篇中取材多本於美人霊綬氏所著《十九世紀末世界之政治》，潔丁士氏所著《平民主義与帝国主義》，日本浮田和民氏所著《日本帝国主義》，《帝国主義之理想》等書而参以己見，引伸発明之」（『飲冰室文集点校』2，787 頁）という。石川禎浩によると，「浮田の二篇はそれでいいのだが，ラインシュ（P. S. Reinsch），ギディングス（F. H. Giddings）のほうは，かれは事実の半分しか語っていない。すなわち，かれが主に参照したのは，実はラインシュ，ギディングスの日本語版翻案の独醒居士著「帝国主義」であって，浮田の二著と独醒居士の文章の直接の翻訳だけでも全篇のほぼ半分を占めている。」（石川禎浩「梁啓超と文明の視座」狭間直樹編『共同研究　梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房，1999 年，121 頁）という。さらに言えば，梁啓超が依拠した独醒居士の「帝国主義」は，『国民新聞』（1901 年 11 月 5–12 日）掲載時のそれではなく，『時務三論』（民友社，1902 年）に収録されたものである。また，浮田和民の「日本の帝国主義」と「帝国主義の理想」は，それぞれ『国民新聞』1901 年 4 月 7，9 日，10 日–23 日に掲載されており，のちに前者は『帝国主義と教育』（民友社，1901 年），後者は『国民教育論』（民友社，1903 年）に収録されたが，梁啓超が参照したのは『国民新聞』掲載時のものである（同上，129–130 頁）。なお，当時，ラインシュの著作の日本語訳として，高田早苗抄訳『帝国主義論』（東京専門学校出版部，1901 年。また，高田早苗解説『レイニッシュ氏著十九世紀末世界之政治』東京専門学校出版部，1901 年もある。原著は Paul Samuel Reinsch, *World Politics at the End of the Nineteen Century: as Influenced by the Oriental Situation*, New York, 1900.）がすでに存在した。

(61)「論民族競争之大勢」『新民叢報』2–5，1902 年 2–4 月（『飲冰室文集点校』2，789 頁）。

(62) 同上，802 頁。

(63)「答某君問法国禁止民権自由之説」『新民叢報』25，1903 年 2 月 11 日（『飲冰室文集点校』4，2199 頁）。

(64)「国家思想変遷異同論」『飲冰室文集点校』2，768 頁。

(65)「自由書・論強権」『清議報』31，1899 年 12 月（『飲冰室文集点校』4，2269 頁）。

(66) 内藤湖南の中国史論の分析に関しては，拙稿「中国史像と政治構想 —— 内藤湖南の場合」『国家学会雑誌』第 123 巻 9・10 号（2010 年 10 月），第 123 巻 11・12 号（2010 年 12 月），第 124 巻 1・2 号（2011 年 2 月），第 124 巻 3・4 号（2011 年 4 月），第 124 巻 5・6 号（2011 年 6 月）の五回連載を参照。

(67) 進歩史観，そして，進歩の思想と進化の思想との区別，歴史の「発展」の観念などについて，丸山真男『「文明論之概略」を読む』上（岩波新書，1986 年，94–102 頁）に言及がある。「十九世紀の終りになると，歴史の進歩観といわれるもののなかに，この三つが交りあうわけです。生物学的＝有機体的な進化の理論，啓蒙思想のなかにあった完成思想と結びついた進歩の思想，それから，ヘルダー，ヘーゲルの歴史哲学からマルクスに受けつがれ，さらにのちのドイツ歴史学派に受けつがれていくような発展の思想。起源も考え方も必ずしも一致しないこの三つの思想が，合流して，歴史的進歩観といわれるものを形成してくるわけです。」（同上，99–100 頁）。

(68) 中国では，二十世紀に入って，1890 年代に流行った君主・民主・君民共主という旧三分類（例えば，鄭観応「易言」前掲『鄭観応集』上，65 頁）が，君主専制・君主立憲・民主立憲（共和）の新三分類（例えば，梁啓超「立憲法議」『清議報』81，1900 年 6 月 7 日，『飲冰室文集点校』2，920 頁の割注で，「三種政体，旧訳為君主，民主，君民共主。名義不合，故更定今名」と記す）に転換された。旧分類の持つ混合政体論的発想が影を潜め，新分類に「立憲—非立憲」という基準が採り入れられるようになり，この移行には単なる用語の変化以上の意味を持っているのである。ここでは，モンテスキューの政体論の影響が注目されるべきであろう。梁啓超は，「法理学大家孟徳斯鳩〔モンテスキュー〕之学説」（『新民叢報』4，5，1902 年 3 月 24 日，4 月 8 日）において，モンテスキューの政体三分論を紹介した。そして，1909 年に厳復が全訳を完成した『法意』（日本語訳は『法の精神』と題する）のなかで中華帝国を君主専制政体の典型とするモンテスキューの叙述は，そのまま中国の現状説明にもつながり，中国人の間で自己イメージとして急速に定着していった。よって，彼らの主な関心は，政体の類型論よりもむしろいかに悪い君主専制政体から脱出して立憲政体に移行するか，という政体の段階論にあったのである。

(69) 清末を秦漢と並べて一大変局と見なす秩序意識は，必ずしも梁啓超から始まったわけではない。鄭観応・薛福成などその前の知識人はすでに変局の見方を持っている。ただし，異なっているのは，日清戦争後進化論を受容した梁啓超は，競争を強調しそれまでの中国史上春秋戦国に対する暗黒なイメージを逆転させ，中国の現状を「過渡時代」と規定したところである。なお，東洋法制史研究者の滋賀秀三の中国史に対する基本的な見方には，梁啓超のそれに通じるところがある。「中国はその長い歴史において，最も大局的に見て前後二

回，社会体制の根本的変革を経験した。これを分期点として，中国史の全体を少なくもまず三つの時代に分けなければならない。（中略）春秋以前の古い時代を上代，民国以後を近代，そして中間の長い時代を，他に適当な言葉もないままに，帝政時代と名づけておきたい。」（滋賀秀三『中国家族法の原理』創文社，1967 年，3–4 頁。傍点は原文）。

(70) 元代についての梁啓超の見方には，宋以後の歴史のなかで元代のみが異例であるという内藤湖南の認識と共通するところがある。内藤湖南はその異例の原因について次のように述べている。「これは蒙古の文化並びに政治上の進歩の程度によるのであつて，蒙古の文化は，支那の同時代に比較すると甚しく後れて，却て支那の上古時代と同程度であるのに，支那を征服せるがために，突然に近世的の国家組織の上に君臨したのであるから，その帝室には依然として貴族政治の形骸が遺つて居り，民政の方のみが近代的色彩になつたから，一種の矛盾した状態を現はしたのである。」（「支那近世史」『内藤湖南全集』10，350 頁）。

(71)「辛亥革命之意義与十年双十節之楽観」によると，「我想中国歴史上有意義的革命，只有三回。第一回，是周朝的革命，打破黄帝尭舜以来部落政治的局面。第二回，是漢朝的革命，打破三代以来貴族政治的局面。第三回就是我们今天所紀念的辛亥革命了。」（「辛亥革命之意義与十年双十節之楽観」1921 年 10 月 10 日天津学界全体慶祝会での講演，1921 年 11 月 1–8 日長沙『大公報』に掲載。『梁啓超全集』6，3379 頁）という。また，梁啓超は次のように述べ，君主専制政治に逆戻りはありえないと強調する。「这回革命，就像経過商周之間的革命，不会退回到部落酋長的世界；就像経過秦漢之間的革命，不会退回到貴族階級的世界；所以従歴史上看来，是有空前絶大之意義」（同上，3381 頁）。

(72)「支那近世史」『内藤湖南全集』10，349 頁。なお，ここに収録されている「支那近世史」は，講義の最終回にあたる 1925 年のノートによるものであるとする（内藤乾吉「あとがき」『内藤湖南全集』10，526–530 頁）。1947 年に『中国近世史』という題名で弘文堂から出版された。

(73)「支那の政治」『支那研究』教育学術研究会編，1916 年 6 月 8 日（『内藤湖南全集』4，553 頁）。

(74) 佐藤慎一は，「宋近世説」は清末の中国においては存在しなかったと論じる際，梁啓超の例を挙げて次のように述べている。「例えば梁啓超は，論文「中国専制政治進化史論」の中で，秦以降の諸王朝の統治体制の中では宋の中央集権体制が最も完備したものであると述べ，康有為もまた論文「官制議」において同じ趣旨のことを述べている。だが，それらはあくまで「二千年来の君主専制体制」という枠内における宋代の意義の相対的評価に過ぎず，内藤のように宋を中国史上の大転換期として位置づける見解は全く存在しない。」（佐藤慎一「中国に宋近世説は存在したか？ ── 清末知識人の宋代イメージ」『中国 ── 社会と文化』20，2005 年，435 頁）。しかし，清末に宋近世説が存在しないことはおそらく確かであったとしても，「中国専制政治進化史論」において，梁啓超は必ずしもそういう意味のことを論じているとは限らない。梁啓超は，「宋制地方之権大衰，而中央之権亦不見其盛，蓋文弱之極，与外患相終始，無足云者」（「中国専制政治進化史論」『飲冰室文集点校』3，1654 頁）という。

(75)「唐宋変革」をめぐる学界の研究動向について，宮澤知之「宋代農村社会史研究の展開」（谷川道雄編著『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所，1993 年），渡辺信一郎「時代区分論の可能性 ── 唐宋変革期をめぐって」（『古代文化』48–2，1996 年 2 月），包弼德（Peter K. Bol）著・劉寧訳「唐宋転型的反思 ── 以思想的変化為主」（“Reconsidering the Tang-song Transition: with Particular Attention to Intellectual Change”，劉東編『中国学術』1–3，商務印書館，2000 年），羅祎楠「模式及其変遷 ── 史学史視野中的唐宋変革問題」（『中国文化研究』，2003 年第 2 号），張広達「内藤湖南的唐宋変革説及其影響」（栄新江編『唐研究』11，北京大学出版社，2005 年），李慶「関於内藤湖南的「唐宋変革論」」（『学術月刊』38–10，2006 年 10 月）に詳しい。「唐宋変革」を相対化する立場に立つ研究として，下記のものが代表的である。Robert. M. Hartwell, “Demographic, Political and Social Transformations of China 750–1550,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 42, No. 2, 1982, pp. 365–442. James T. C. Liu, *China Turning Inward: Intellectual-Political Changes in the Early Twelfth Century*, Cambridge, Mass.: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1988.（劉子健著・趙冬梅訳『中国転向内在：両宋之際的文化内向』江蘇人民出版社，2002 年。）Peter K. Bol, *This Culture of Ours: Intellectual Transitions in Tang and Sung China*, Stanford University Press, 1992.（包弼德著・劉寧訳『斯文：唐宋思想的転型』江蘇人民出版社，2001 年。）内藤湖南は，主に君・臣・民の関係で唐と宋との間の社会性質の変化を説明している（Tang-Sung Transition）のに対して，唐と宋との間の変化を相対化する欧米の学者は，主に思想史視野のなかにおける人口・地域・エリートの関係に着目してそれを歴史の長期的発展過程のなかの一段階として捉える傾向がある（Transformation of China）。Peter K. Bol は，内藤湖南の唐宋変革・宋近世説について，

最終の理想として特定的価値の完成した状態が想定された上に，それに向かって一歩一歩接近する過程が構想されており，そこには目的論的要素が強く存在する，との一面を批判している。なお，内藤湖南の説より時期的にだいぶ後になるが，唐と宋の異質性に目をつけた中国人学者の議論も目立っている。例えば，「綜括言之，唐代之史可分為前後両期，前期結束南北朝相承之旧局面，後期開啓趙宋以降之新局面。関於政治社会経済者如此，関於文化学術者亦莫不如此。」（陳寅恪「論韓愈」『歴史研究』1954 年第 2 号，113–114 頁）。また，「論中国古今社会之変，最要在宋代。宋以前，大体可称為古代中国，宋以後，乃為後代中国。秦前，乃為封建貴族社会。東漢以下，氏族門第興起。魏晋南北朝定於隋唐，皆属門第社会，可称為是古代変相的貴族社会。宋以下，始是純粋的平民社会。除蒙古満州異族入主，為特権階級外，其昇入政治上層者，皆由白衣秀才平地拔起，更無古代封建貴族及門第伝統的遺存。故就宋代而言之，政治経済，社会人生，較之前代莫不有変。」（銭穆「理学与芸術」『宋史研究集』7，台湾書局，1974 年，2 頁）。

(76)「欧洲政治革進之原因」『庸言』1–5，1913 年 2 月 1 日（『飲冰室文集点校』4，2365 頁）。

(77) 同上，2365 頁。

(78) 中国には秦以来階級，すなわち出生による身分の違いが存在しなかったという考えは，梁啓超だけでなく，清末の知識人の間では一般的である。とりわけ西洋のような貴族階級と平民階級との政治階級の格差が中国にはなかったという点から演繹する「中国に階級なし」説は，改良派（梁啓超ら）にも革命派（孫文・章炳麟など）にも共通するものである。ヨーロッパを遊歴して帰国した梁啓超は，1920 年 3 月 10 日あたりの演説のなかで，中国の政治・経済・社会の諸問題に対する所感と知見を詳しく語っている。そのうち，なぜ中国で代議制度がうまくいかなかったのかについて，次のように述べている。「代議制度なるものは欧州では間違いなく一種の階級であるのに対して，中国ではその可能性が無いからにほかなりません。けだし貴族や地主が存在してはじめて立憲ということが可能になるわけであり，政治権力を少数の賢人の手に集中することによって，民衆に手渡す過渡とするのです。たとえば，イギリスにはたしかにこうした少数の優秀な人々がいて，それがまず貴族から中産階級へ，さらには平民へと拡大していきました。このように順次下へ移っていくには階級というものがなければなりませんし，これら少数の人々はいずれも自らそれを担う覚悟を持っていたのです。日本も同様であり，固有の階級に属する少数の優れた人々が人民全体を代表しています。一方，中国はそうではなく，秦代以来，長らく階級というものが存在しなかったため，イギリスや日本を模倣しようとしたものの，結局のところ失敗に終わりました。社会の根底がまったく異なっていたからなのです。」（「中国公学における梁任公の演説」『申報』1920 年 3 月 15 日。丁文江・趙豊田編，島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』4，岩波書店，2004 年，298 頁）。そして，章炳麟は，「代議然否論」などにおいて，代議制を階級制度の復活と見なし，それを中国に導入すべきでないとする論を展開し，立憲政治に反対する立場に立っている。増淵龍夫「歴史意識における尚古主義と現実批判 —— 日中両国の「封建」「郡県」論を中心として」（林達夫・久野収編『岩波講座　哲学Ⅳ　歴史の哲学』岩波書店，1969 年。増淵龍夫『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店，1983 年再録）を参照。

(79)「近代支那の文化生活」1928 年 7 月東亜同文会講演会講演（『内藤湖南全集』8，122 頁）。

(80) 同上，122–123 頁。

(81)「支那近世史」『内藤湖南全集』10，361 頁。

(82) 前掲『梁啓超年譜長編』4，36 頁。1915 年 9 月 4 日，『申報』が『京報』〔*Peking Gazette*〕の記者の取材に応じた梁の談話を転載したものである。なお，「異哉所謂国体問題者」（『大中華』1–8，1915 年 8 月 20 日）においても，この議論が詳しくなされている。

(83) 専制を否定的に捉える場合においても，貴族専制・君主専制・民主専制のいくつかのタイプが存在する。梁啓超は「近世学者述近世国家之分類，大率分為専制君主国，立憲君主国，立憲民主国。吾以為此分類甚不正確，何以故？　専制者不独君主国，而民主国亦有非立憲者。（有立憲之名，無立憲之実，則等於非立憲也。）」（「開明専制論」『新民叢報』73–75，77，1906 年 1 月 25 日，2 月 8 日，25 日，3 月 25 日。『飲冰室文集点校』3，1389 頁）と言い，中国を取り囲む国際環境と時代状況を考慮し，一時「開明専制」を唱えていた。論説の中で，彼は，「本篇雖主張開明専制，然与立憲主義不相矛盾」（同上，1387 頁）と言い，「開明専制者，実立憲之過渡也，立憲之預備也」（同上，1402 頁）と主張する。

(84)「新雑誌及び新聞」『万報一覧』173，1888 年 4 月 15 日（『内藤湖南全集』1，440–441 頁）。

(85) 梁啓超は，湖南のように「上古」・「中世」・「近世」という用語にしっかりと時代の特質を与えて時代区分を行なったとは言えない。しかし，彼によって西洋の歴史三区分法が確実に中国に導入されたのである。梁啓

超における「近世」は現在に近い時代という意味であろう。

(86)「莅広東同郷茶話会演説辞」1912 年 10 月 28 日（『梁啓超全集』4, 2519 頁）。

(87)「新民説・論進歩」『飲冰室文集点校』1, 582 頁。

(88)『支那上古史』弘文堂, 1944 年（『内藤湖南全集』10, 10–11 頁）。傍点は原文。

(89)『新支那論』博文堂, 1924 年（『内藤湖南全集』5, 512 頁）。最初は「支那を何うするかの問題に当面して」という題で,『大阪毎日新聞』に連載した。関東大震災のため途中で掲載中止になったが, 1923 年 8 月 23 日から震災の翌日の 9 月 2 日まで八回, 9 月 24 日から 10 月 3 日まで六回連載した。後に, これを改訂増補して『新支那論』として 1924 年 9 月に博文堂から出版した。

(90)「歴史上中華国民事業之成敗及今後革進之機運」『改造』3–2, 1920 年 10 月 15 日。「支那人の観たる支那将来観と其の批評」『大阪朝日新聞』1921 年 11 月 17 日–23 日。ほかに, 内藤湖南は次のようにも述べている。「尚支那の運命に関する根本的の問題に関しては昨年の冬頃発表せる梁啓超氏の「歴史上中国国民事業の成敗及び今後革新の機運」と題する有名なる論文がある。頗る空理に流れて居る傾きあるも其の間に実際問題に対する有力なる暗示をも含んで居て, 真に支那の問題を論究せんとするものは, 斯かる有力なる論文に着眼する必要がある。目前の変動常なき問題よりかは, 斯の方面に留意することが遥に大切である。予輩が之に関する意見は稿を改めて他の機会に発表することゝしたいと思つて居る」（「外人の対支観察と蔵相の行政費供給論」『大阪朝日新聞』1921 年 7 月 12 日, 13 日。『内藤湖南全集』5, 152 頁）。

(91)「支那人の観たる支那将来観と其の批評」『内藤湖南全集』8, 162 頁。

(92) 同上, 163 頁。内藤湖南は政治と文化を分けて考察し, 政治の中心も文化の中心も時代とともに移動するが, 政治の中心地と文化の中心地は必ずしも一致しないとする。これがいわゆる「文化中心移動説」である。彼は早年の論説「地勢臆説」（『大阪朝日新聞』1894 年 11 月 1 日, 2 日。『内藤湖南全集』1 所収）で初めてこの説を披露したが, 後年それを体系的に論じ『新支那論』（博文堂, 1924 年）の第三節「東洋文化中心の移動」に集大成した。

(93) 同上, 164 頁。民族や国家を超えて勢力や文化の中心が移動するというこの叙述は, 後年の内藤湖南の議論を思わせる。「支那の革新に対して日本の力が加はるといふことは, 単に一時の事情から来た問題ではない。これは東洋文化の発展上, 歴史的の関係から来た当然の約束といつてもよろしい。支那とか日本とか朝鮮とか安南とかいふ各国民が存在して居るのは, 各国家上には相当に重要な問題ではあらうけれども, 東洋文化の発展といふ全体の問題から考へると, それらは言ふに足らない問題であつて, 東洋文化の発展は国民の区別を無視して, 一定の経路を進んで行つて居るのである。」（「新支那論」『内藤湖南全集』5, 508 頁）。

(94) 同上, 164 頁。

(95) 同上, 164–165 頁。

(96) 同上, 167 頁。なお, 一ヶ月後内藤湖南は「支那の国際管理論」（『表現』1–2, 1921 年 12 月。『内藤湖南全集』5 所収）という題名の論説を発表し,「勿論自分一個としては此問題に就ては已に多年考究した所であつて, 所謂支那の国際管理論の如きは或は自分が最も早い主唱者であるかも知れぬ」（「支那の国際管理論」『内藤湖南全集』5, 154 頁）と述べている。

(97)「新民議」『新民叢報』21, 23, 1902 年 11 月 30 日, 12 月 30 日（『飲冰室文集点校』2, 652 頁）。

(98)「支那上古史」『内藤湖南全集』10, 12 頁。

(99)「支那の政治」『内藤湖南全集』4, 553–554 頁。

(100) この四種の文献のうち, 陳天華の『警世鐘』（1904 年）を除けば, 他の三種はともに 1903 年に出版されたものである。島田虔次・小野信爾編『辛亥革命の思想』（筑摩書房, 1968 年）に, 鄒容の『革命軍』や陳天華の『警世鐘』などの訳文と解説が収められている。

(101) 西順蔵・島田虔次編『清末民国初政治評論集』（平凡社, 1971 年）に, 島田虔次訳の「新中国未来記」と解説が収録されている。『新中国未来記』は全五回からなる未完の作である。第一回と第二回は 1902 年 11 月発行の『新小説』創刊号に掲載され, 第三回は第二号（同年 12 月）, 第四回は第三号（1903 年 1 月）にそれぞれ掲載されている。第四回までは順調に進行したが, 第五回は半年以上経過した後の第七号（1903 年 8 月）に掲載された。第五回が梁啓超の作ではないことについて, 余立新は,「《新中国未来記》第五回不是出自梁啓超之手」（『古籍研究』, 1997 年第 2 号）において, 五つの根拠を挙げ, 詳しく論証している。さらに, 山田敬三の推測によると, この第五回は羅孝高（1876–1949）よって作られた可能性が高いという（山田敬三「『新中国未来記』をめぐって —— 梁啓超における革命と変革の論理」狭間直樹編『共同研究　梁啓超：西洋近代思想

受容と明治日本』みすず書房，1999 年）。

(102)「新中国未来記」『新民叢報』1-3，1902 年 11 月-1903 年 1 月（『梁啓超全集』10，5609 頁）。

(103) 同上，5609 頁。作品中の登場人物はもちろん実在の人物ではないが，工夫により登場人物の名前にそれぞれ一定の意味が込められている。後年，梁啓超は，「壬寅秋間，同時復辦一《新小説報》，専欲鼓吹革命，鄙人感情之昂，以彼時為最矣。猶記曾作一小説，名曰《新中国未来記》，連登於該報者十余回，其理想的国号，曰中華民主国，其理想的開国紀元，即在今年，其理想的第一代大総統，名曰羅在田，第二代大総統，名曰黄克強，当時固非別有所見，不過辦報在壬寅年，逆計十年後大業始就，故託言大中華民主国祝開国五十年記念，当西暦一千九百六十二年，由今思之，其理想之開国紀元，乃恰在今年也。羅在田者，蔵清徳宗之名，言其遜位也；黄克強者，取黄帝子孫能自強立之意，此文在座諸君想尚多見之，今事実竟多応乃至与革命偉人姓字暗合，若符讖然，豈不異哉。」（「鄙人対於言論界之過去及未来」『梁啓超全集』4，2509 頁）と述べている。つまり，「羅在田」という名前のなかで，「羅」は光緒帝の姓である愛新覚羅，「在田」（zàitián）はその載湉という名を同音の漢字に置き換えたものである。「黄克強」は，黄帝の子孫が克く自強する意味を寓した。なお，孫文・章炳麟とともに辛亥革命三尊の一人に数えられる黄興（1874-1916）は，1902 年当時，まだ無名の存在であったが，彼の字は偶然にも「克強」である。また，小説中の架空の維新成功の年 1912 年が，実際に民国元年となった，という偶然とともに，梁啓超自身をも驚かせたようである。

(104)「論小説与群治之関係」『新小説』1，1902 年 11 月 14 日（『飲冰室文集点校』2，758 頁）。

(105)『新中国未来記』の内容的検討は，王閏梅「梁啓超の『新中国未来記』について ── 兆民の『三酔人経綸問答』と対照させて」（『言葉と文化』9，名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻，2008 年 3 月）に詳しい。

(106)「新中国未来記」『梁啓超全集』10，5628 頁。

(107) ほぼ同時期の「敬告我国国民（癸卯元旦所感）」（『新民叢報』25，1903 年 2 月 11 日。『飲冰室文集点校』4 所収）において，「準備工作」の重要性も論じられている。また，「意大利建国三傑伝」において，マッツィーニ（Giuseppe Mazzini 1805-1872），ガリバルディ（Giuseppe Garibaldi 1807-1882），カヴール（Camillo Benso, Conte di Cavour 1810-1861）を中心とするイタリアの統一建国の物語が描かれている。「真愛国者，其所以行其愛之術者不必同，（中略）有時或相岐，相矛盾，相嫉敵，而其所向之鵠，卒至於相成相済而不相合。」（「意大利建国三傑伝」『新民叢報』9，10，14-17，19，22，1902 年 6 月-12 月。『飲冰室文集点校』4，2084 頁）とあるように，梁啓超は，愛国という前提を共有する限り，立憲・共和という手段のレベルでの対立が存在するとしても，真に救国のための変革を目指すものであれば，それぞれの主義主張に従いつつ議論を重ねるのが理想的であり，立憲論者と革命論者とは互いに補い合う存在にもなれると認識している。その理想的な「愛国者同士の討議」の典型こそ「新中国未来記」に描写された主人公「黄克強」と「李去病」の議論である。

(108)「新中国未来記」『梁啓超全集』10，5628 頁。

(109) 主人公の二人は，二十歳前後（最初イギリスへ留学する時点で，黄は二十二歳，李は二十一歳）まで陸〔九淵〕王〔陽明〕学，中国史学，康有為の『長興学記』，譚嗣同の『仁学』といった中国の学問に専念した。これだけでは中国を救えないので，加えてイギリスを軸にして，ドイツ，フランスの西洋学が必須になってくると考えるようになった。とりわけ，黄への役割分担から彼の知的人格形成が梁啓超の理想的モデルであることがわかる。

(110) 郭沫若『我的幼年』上海：光華書局，1929 年。引用は，郭沫若『少年時代』人民文学出版社，1979 年，112-113 頁。

(111) 梁漱溟は，晩年の回想で次のように語っている。「梁任公在著作中一面提示新的人生観，一面指出中国社会之如何改造正切合我対探求人生問題，中国問題的需要，得益甚大。他在報刊上介紹外国各家学説，著作，使我得以領会西洋思想文化不少；他関於先秦諸子及明清大儒的許多論述，意趣新而筆調健，思想古代是我対中国文化最初之接触。这段時間，梁任公先生対我的影響，不徒在思想上，還在生活上，諸如立志，省察，克己，涵養等等。」（『梁漱溟問答録』湖南人民出版社，1988 年，42-43 頁）。

(112) 梁漱溟「紀念梁任公先生」『掃蕩報』1943 年 1 月（夏暁紅編『追憶梁啓超』北京：中国広播電視出版社，1997 年，259 頁）。

(113) 康有為「与任弟書」1902 年 12 月 13 日（丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社，1983 年，299 頁）。

(114) 章士釗「通訊欄・《東西文化及其哲学》書評」『甲寅周刊』1-3，1925 年。
(115) 譚人鳳『石叟牌詞』上海書店出版社，2000 年（夏暁紅編『追憶梁啓超』北京：中国広播電視出版社，1997 年，483 頁）。
(116) 黎東方「大師礼賛（節録）」『平凡的我』台北伝記文学出版社，1969 年（夏暁紅編『追憶梁啓超』北京：中国広播電視出版社，1997 年，396 頁）。
(117)「三十自述」において，「吾友韓孔広詩云：“舌下無英雄，筆底無奇士。”嗚呼！　筆舌生涯，已催我中年矣！　此後所以報国民之恩者，未知何如？　毎一念及，未嘗不驚心動魄，抑塞而誰語也？」（「三十自述」1902 年 12 月作。『飲冰室文集点校』4，2225 頁）とし，梁啓超は自らの考えを寄せた。原文は「今日之世界何？鉄血世界也，而可以筆舌了汝責任乎？」（「自由書・舌下無英雄，筆底無奇士」『清議報』39，1900 年 3 月 21 日。『飲冰室文集点校』4，2283 頁）である。
(118) 梁啓超『王荊公』広智書局，1908 年。
(119) 夏暁紅「以覚世始　以伝世終 —— 梁啓超与 20 世紀中国」『読書』1995 年第 5 号（同編『閲読梁啓超』生活・読書・新知三聯書店，2006 年所収）。
(120)「外交坎内政坎」，北京高等師範学校平民教育社での講演（『梁啓超全集』6，3410 頁）。